

みんなくりポジトリ

国立民族学博物館 学術情報リポジトリ National Museum of Ethnology

モンゴル研究のパラダイム：
タルバガン，野に満ちし頃：
文献資料より見たタルバガン

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 国立民族学博物館, National Museum of Ethnology 公開日: 2010-02-26 キーワード: 作成者: 原山, 煌 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15021/00003523

タルバガン，野に満ちし頃

——文献資料より見たタルバガン——

原 山 煌*

- | | |
|------------------------------|--|
| I タルバガンのあらまし | IV-4 燻し出し猟 |
| I-1 タルバガンの名称 | V タルバガン大濫獲 |
| I-2 タルバガンの目撃者 | V-1 タルバガンの毛皮獣としての価値 |
| I-3 タルバガンを実見した日本人たち | V-2 タルバガン「受難」 |
| II タルバガンの経済的価値 | V-3 驚異的な産出量 |
| II-1 タルバガンの利害得失 | VI 齧歯類と結びついたベスト |
| II-2 タルバガンの用途 | VI-1 ベスト流行のありよう |
| III 民話に見えるタルバガン | VI-2 3度のパンデミック |
| III-1 エルヒー＝メルゲンの物語 | VI-3 1910-11年以後の「満洲」地域に
おけるベスト大流行，その後 |
| III-2 弓の上手なタルバガンの物語，そ
のほか | VI-4 媒介動物としてのタルバガン |
| IV タルバガン狩猟 | VI-5 モンゴルにおけるタルバガン狩り
の知恵 |
| IV-1 ベルグテイのタルバガン猟 | VII 終章 タルバガンの不幸 |
| IV-2 畏猟で捕らえる | |
| IV-3 タルバガンの銃猟 | |

I タルバガンのあらまし

I-1 タルバガンの名称

タルバガンというのは，中央ユーラシアのステップ（草原）地帯のうち，高原性の地域に見ることのできる哺乳類齧歯目リス亜目リス科マーモット属の動物である。モンゴル，さらには中央ユーラシア地域の野生動物としては，オオカミとならんで最もよく知られた動物といえるであろう。棲息範囲は，東は大興安嶺山脈，西はウラル山脈，ザバイカルからチベット高原，カスピ海にいたる広大な地域にわたる（スクニヨ

* 桃山学院大学文学部，国立民族学博物館共同研究員

Key words : tarbagan, pest, fur, Mongol, "Man-Mou"
キーワード：タルバガン，ベスト，毛皮，モンゴル，「満蒙」

フ 1935: 162)。学名は *Marmota bobac* という。だからボバックとも呼ばれる。

19世紀から今世紀の初頭、中央ユーラシアを旅行したヨーロッパ世界の人たちが、このタルバガンを目撃したとき、それを「マーモット」と呼ぶことが多かったが、非常に適切な呼称を用いていたことになる。マーモットの仲間は、ヨーロッパのアルプスからシベリア、アラスカ、北アメリカ西部にいたる地域に広く棲息しているから、ヨーロッパの人たちにとっては比較的身近な存在だったのだろう。

タルバガンは、タルバガとも呼ばれ、漢字では「塔刺不花」などと音訳表記される。後述するようにタバラガといわれる地域もある。いずれもモンゴル語呼称である。ダラハンと呼ばれることもあるが、それは次にいう「獺児」という漢語からきている。本論では「タルバガン」の名称で文を進める。

モンゴルにおいては、1歳のタルバガンをムンドゥル *möndöl*、2歳のをホチル *qotil* (ロブサンによれば *qotola*)、3歳のはシャル=ハツァル *sira qačar* と呼び、また成長後の牡はボルヒ *burki*、牝はナガイ *nayai* というふうに、年齢別・性別の呼称も知られている (Намнандорж 1964: 117; Lubsang 1980: 1278; Минис 1983: 36)。

漢語では「早獺」「早獺子」「獺児」、あるいは「土撥鼠」などと呼ばれる。「土撥鼠」なる名称は、元代に著されたモンゴル族固有の伝統的料理を多く記載した独特の料理養生書『飲膳正要』(忽慧思撰)に、「塔刺不花」の注釈として「一名土撥鼠」とある。モンゴル人によって、みずからの歴史観と叙述形式にもとづいて、自分たちの言葉で、最初に著された記念すべき歴史書(その内容は歴史文学書といったほうが適切であろうか)『元朝秘史』(Mongyol-un niyuča tobčiyān, 「モンゴルの秘密の綴り」というほどの意。以下『秘史』と略す)にも見える。この書におけるタルバガンの漢訳(傍訳)は、やはり「土撥鼠」である。この名称は、タルバガンが地中深く穴を掘って、その際掻きだした土をはねあげる習性からあてた字であろう。

明人李時珍の著わした代表的な本草学文献『本草綱目』に見える「土撥鼠」の項からは、当時の中国世界におけるタルバガンについての知識がよく窺える。そこに次のような記述がある。

「鼯鼠」その音は「駝撥」。『飲膳正要』に言う「塔刺不花」。『唐書』には「鼯鼠」とある。それが俗訛して「土撥」となった。

この指摘からすると、「土撥鼠」の「土撥」はタルバガンの発音を写した漢字呼称でもある。同書には、挿絵が添えられている。図には版本によって少しずつ相違があ

るが、いずれもタルバガンの姿としては適切とはいえない。穴居であるという記述からきたものだろうか、岩穴のようなところから、半身をのぞかせた図像となっている。この動物が棲む穴とは、いわゆる洞穴ではない。どのように穴居性なのかということをよく確かめずに、当て推量で描いた図であることがよくわかる（李 1954: 図巻下）。

また宋代編纂の『集韻』の「鼯」には「その鳴き声は犬が吠えているよう」という記述がある。タルバガンが、他のマーモットの仲間と同じように、歯音や鳴き声による音声コミュニケーションをさかんに行うことは広く知られている事実であるが、タルバガンと同じ齧歯目リス亜

目リス科に属し、新大陸において有名な存在である *Cynomys* は、「プレーリードッグ」という呼び名にその特徴をそのまま反映させている。

清朝時代の18世紀の末、乾隆帝の命により、満洲語・モンゴル語・チベット語・ウイグル語、そして漢語の5種からなる浩瀚な多言語語彙対照辞典『御製五体清文鑑』が編纂された。中国の類書（百科事典）の伝統にならって、天・時令・地・君・論旨などの「部」、それぞれの部をさらに「類」というように、整然たる分類のもとに編纂されている。同書の巻31「獸類第5」に、満洲語 *tarbahi* が立項されているが、モンゴル語はもちろん *tarbaga*、ウイグル語でも *tar bagan* とされており、その言葉の広がりや十分にかがわせる。なお、漢語では「獺兒」、チベット語では *pyi ba, ci ba* とある（田村・今西・佐藤 1966: 915）。

タルバガンという呼称は、トルコ系のヤクート、ソヨート、テレウトなどの諸族にも採りいれられて使われている。チベット族地域以外の中央ユーラシアの広大な地域の住人たちが、タルバガンを同一の語で呼んでいるといつてよい。その棲息地域の広大さと知名度の高さははっきりわかる。タルバガンの存在が中央ユーラシアの人た

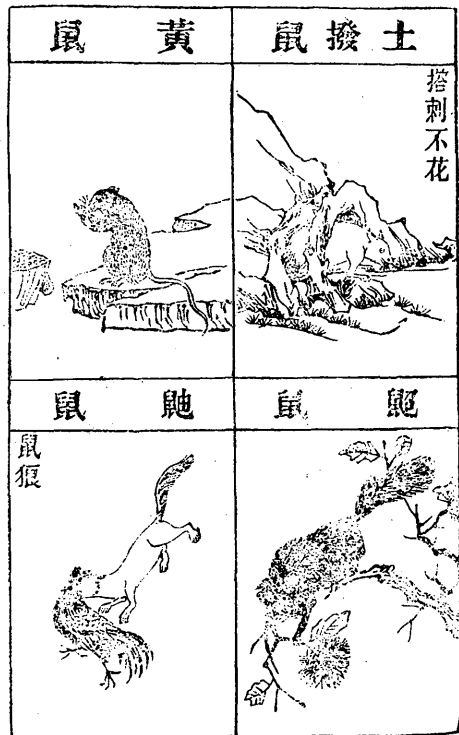


図1 『本草綱目』挿絵のタルバガン（右上）

ちに良く認識されていたことは、「タルバガタイ」(tarbayatai)、すなわち「タルバガンがいる(ところ)」という地名が散見されることから容易に想像できる。

まずロシア地域。ソ連邦時代、書店経由で日本にもたらされた、同国刊行の一般向けの世界地図冊としては、おそらく最も詳細な『世界地図帳』を見てみる。

いくつかのタルバガタイが出てくる。まずザバイカル(バイカル湖の東方地域)。ブリヤートのウラン=ウデの南方50kmほどの所にタルバガタイ炭鉱を擁する同名の街があり、そこを通過してチタに向かう道がヒロク河畔に近づいたあたりにも同名の街がある。さらに、同じくウラン=ウデからウダ河に沿って東方に向かうと、ホルンスタの少し手前にその名を持つ街が存在する。この地図冊の「プリバイカルとザバイカル」地方に記載されたタルバガタイは3ヶ所、しかもこの3つは、直線距離にして一辺の平均120kmほどの三角形をかたちづくるほど近接している。もうひとつ、チタの南方のモンゴル国国境近く、ドゥリドゥルガとアクシャの間あたり、オノン河河畔北側にも同名の街が存在する。先に述べた3つのタルバガタイの後二者の間に、バルン=タルバガタイ(モンゴル語で「西(右)のタルバガタイ」の意)という街もある(Atlas 1954: 13-74)。

モンゴル国にはタルバガタイ山脈がある。ホボスゴル・ザブハン・アルハンガイの3アイマク(県にあたる)の交わるあたり、少し北のブルナ山脈に平行するようにはほぼ東西に走る(Atlas 1954: 147-148)。

そこからほぼ西北方向にロシア連邦に入った、モンゴル国に隣接するトゥバ共和国の首都キジルにおいて、いわゆる小イェニセイ河は大イェニセイ川へと合流するのであるが、その小イェニセイ河に流れこむ河の一つにタルバガタイ河がある(Atlas 1954: 67-68)。

さらに西方にあたる、カザフスタンのザイサン湖の西に位置するアヤグズから東へ100kmほどの所、アヤグズ河の畔にもタルバガタイはある(Atlas 1954: 53-54)。そしてその南方には、タルバガタイ山脈と呼ばれる山なみがそびえている。この山脈の南にもタルバガタイが実在した。それは、中華人民共和国新疆維吾爾自治区の西北隅にある。1864年、ロシア帝国と清朝が締結した国境確定条約の通称のタルバガタイである。漢名では「塔城」と呼び、現在の地名もそうであるが、それは「塔爾巴哈台城」の略称である。もともとの名をチュグチャクというこの街は、その北方に連なるタルバガタイ山脈にちなんで、この名で呼ばれるようになったのである。

清朝の乾隆帝の時代、先述の『五体清文鑑』と同様の趣旨でつくられた『欽定西域同文志』という地名辞典がある。当時、乾隆帝はジュンガル部・回部を平定し、威勢

を誇っていたが、それを記念して『皇輿西域図志』『平定準噶爾方略』などの書が編纂された。その際、新しく領土となった地名の漢字音訳表記を統一するための参考書として編纂されたのが、この書である。3000をこえる地名・山名・水名が採録されている。満洲文字の音訳が見出しとなっており、漢字訳、語義などが記され、モンゴル・チベット・カルムク（モンゴル文字をもとに創られたいわゆるトド文字）、アラビアの4種の文字で発音を示している。マルチリンガルな超大国、清朝の文化的象徴ともいべき成果であった。この書にも、今述べているタルバガタイ山脈（巻4「天山南北路山名、天山北路準噶爾部所属諸山」）、「塔城」のタルバガタイ（巻1「天山北路地名、雅爾路」）が、ともども採録されている。地名説明には、「その地には獺が多く、故に名づけられた」と書かれている。ここに言う「獺」とは、もちろんタルバガンのことである（榎・岡田・松村・本田 1961: (上) 32-33, 244）。

以上挙例したタルバガタイの名をもつ地は、ザバイカル、モンゴル国の北辺を通過して新疆のこの一帯、いずれも中央ユーラシアの高原地帯という地勢からして、タルバガンの多く見られる地域に属する。後述する事情によって、20世紀前半、タルバガンは濫獲される憂き目にあうのであるが、それ以前の時期においても、タルバガンは、中央ユーラシアの山がちの草原には、なくてはならぬ点景だったのである。タルバガンが地名とされるのは、いたるところに見られるこの特徴ある動物への一種独特の親しみがあつたことだったにちがいない。

I-2 タルバガンの目撃者

1919年から翌年にかけて、トラ河・オノン河間を通過、その地の様子を調査したマイスキーの報告によれば、濫獲が始まるまでの時期、タルバガンはモンゴル人の間では「食用として多少」捕獲されるだけだった。

タルバガンは「非常に繁殖して、全蒙古の山野は彼らの棲息する穴にて覆われ、数百万のタルバガン（原文 *сүрөк* スローク。ロシア語でマーモットの意。引用書中に「蒙古人間にはタルバガンと称せらるるスローク」と明記されている（マイスキー 1927: 318））ので、タルバガンとして表記する。以下同じ）は物珍しげに喚声を挙げて鳴き交わし、たえず山野を震駭せしめて居った」。ときあたかも夏のさなか、焼けるような暑さにおおわれた草原では、大きな黒い蝶が花から花へと飛びかっているが、人はもちろんのこと、ヒツジやヤギなど家畜の姿もまったく見えず、ただ肥え太った幾千とも知れないタルバガンが穴の入り口でひなたぼっこして鋭い声をはりあげて鳴きさげんでいたと。

また、マイスキーによれば、タルバガンの商品価値が広く知れわたって濫獲されるようになってからでさえ、需給状況の高下によっては、次のような事態も起こる。すなわち、そこでは「曠野到る処に多数の」タルバガンが見受けられ、「広大なる地域がタルバガンの巣となって穴にて覆われ、乗馬の通行は困難なる位であった」と。マイスキーは言う。「数年間比較的平穏であった事は、タルバガンの繁殖を助長せしめた如く」であるが、それでも現地の人々の言では、「其数遠く昔日に及ばず、尠くとも其半数減じた」というのだから、改めてこの動物の旺盛な繁殖能力、復原力に感心させられるし、往時の壮観とも言うべき豊饒な棲息ぶりも十分想像できる（マイスキー 1927: 318-320）。

だが20世紀はじめの、タルバガン=ブームともいうべき濫獲ののちには、タルバガンの分布にも変化が生じることもあったようで、1945年の日本の敗戦直前、フルンボイル（ホロンバイルとも。ロシア人たちはこの地域をバルガと呼ぶ）草原のモンゴル人民共和国との接壤地帯であるケルレン河流域に赴いた堺六郎は、タルバガン（堺は「豆狸」と表記し、タルバガンと振り仮名をつけている）が、その地のモンゴル人から「ザハネ=アマタン」*jaq-a-yin amitan*、すなわち国境の動物と呼ばれていたと伝える（堺 1987: 65）。どちらかという、あっけなく捕獲されてしまうこの動物が、今や「人の立ち入れない国境地帯にのみ」棲息している事態が、その別名の由来と言っているのである。もともと人煙稀な草原地帯、すなわち純然たる野生の世界に棲息していたタルバガンが、住環境を深刻に脅かされていたことを思わせる事実である。

こうしたタルバガンの「逃避行」については、タルバガン毛皮の相場が下落していた1919年段階に、前記マイスキーも指摘している。「人に逐わるるタルバガンは、捕獲の比較的容易な平野から、遙かに捕獲の困難な高い山腹や、又は水のない曠野に居を移した」（マイスキー 1927: 319）と。

しかしながら、1927年、ダリガンガを調査したカザケヴィッチは、これとは対照的な記述を残している。ダリガンガは、現在のモンゴル国の東南部スフバートル県の最南部から中国の内蒙古自治区にかけての一带である。カザケヴィッチが通りかかったアルタン=オボ（ダリ=オボとも）と呼ばれる地で、誰もタルバガンを捕らえることがないので、沢山繁殖し、人間に慣れてしまい、そばに寄っても逃げないという報告を残している（Казакевич 1930: 60）。言うまでもなく、オボ（オボー）とは、石を積み上げてつくった一種の聖なる建造物である。石組みの上には、木の枝や、木製の剣、さらにはもろもろの呪物をさしこんだり、安置したりするのが普通である。牧民たちは、初夏、あるいは秋に、オボーを通じて、最高神たる天や、周囲の自然をつかさど

る諸神格に、順調な遊牧を祈ったり感謝したりするのである。したがってその周辺は、神聖な場所であるという認識があり、殺生や不浄な行為は厳重に禁じられているのがつねである。だがそれも場合によっては、単なる建て前にしかすぎなくなることもあったようだ。同じくカザケヴィッチは、僧侶までがイヌを使ってタルバガン狩りをしていると記録している。

鳥居龍藏は、後出の旅行記のタルバガンについての記述のなかで、この動物を、マルコ=ポーロの『東方見聞録』のなかに見える「ファラオネズミ」と同一視している。

すなわち、マルコ=ポーロの書中、「タルタール人」の食料について「彼らの常食は肉と乳、それに狩猟の獲物であるが、夏むきならこの辺り至る所の原野に数多いファラオネズミも捕えて食料に供する」と述べているのをとりあげ、これを「タルバガ」に比定するのである（鳥居 1975: 167）。

そしてこの「タルバガ」は、シベリアにも棲息し、シベリアにいるのは *Alactaga*（学名では *Allactaga* と綴る）と称するものであると説明を加えている（鳥居 1975: 167）。

いったい、タルバガンの学名については、すべての引用者が *Marmota* とするわけではなく、文献によって必ずしも一定していないように見うけられる。

鳥居がいう *Alactaga* も、実はタルバガンを言い表すのに適当ではない。鳥居が見た動物は、記事の内容からおしはかると、タルバガン以外のものであるとは考えられないが、名称同定を誤ってしまっている。このときの、目撃経験をふまえた考証に誤りがあることは、この獣がシベリアにもいると言い（このことは正しい）、さらに「シベリアに居るは *Alactaga* と称するものにして、亦之と同じきものならんか。又之を *Kangaroo rat* とも *Zieselemaus* とも云ふ」（鳥居 1975: 167-168）と同定していることから明らかとなる。

1885年から翌年にかけて、ロマノフ朝ロシア帝国治下のシベリア地域におもむき、きわめて苛酷な流刑制度の実態をつぶさに実見した浩瀚な著書によって国際的に大反響をまきおこしたジョージ=ケナンも、旅の途中、オムスク近辺の「キルギス=ステップ」でタルバガンを見ている。イルティッシュ河に沿う変化に富んだみごとなステップには多くの人を恐れない鳥獣たちがいたというが、そのなかの行文に「コサクたちがタルバガンと呼んでいる臆病なはずの小型飛びねずみまでが、枯れ草の中へ飛び込みざまに時おり立ち止まってはこちらを眺める」というくだりがある（ケナン 1996: I, 143）。ケナンも鳥居と同じ誤った判断をしてしまったのである。

鳥居が想定したのは、モンゴル語の *Alaydaya* (n) *Alaydayaqai* <Алагдага> に由来する名称であるが、これは実は「跳鼠（跳兔）」トビネズミ（内蒙大蒙語研

1976: 41), “Jerboa, jumping mouse” (Lessing 1960: 27) をさす呼び名であって、タルバガンとは別物である。「跳兎」とは、かつて中国でトビネズミのことを、その前肢にくらべて桁はずれに大きい後肢を持つ姿から、兎を連想して付された俗称である。

蛇足でもあり、また話が錯綜するが、トビウサギなるものは、別に存在する。*Pedetes* という学名をもつトビウサギは、体長 40 cm 内外、体長をやや上回る長い尾を持つ一種一属の草食獣であり、中央ユーラシアには棲息しない。それよりも明らかにずっと小型の中央ユーラシアのトビネズミとは、全く別の動物である。前近代の東アジアでは、トビウサギという動物については知るよしもないわけであるから、この俗称にはやむをえないところがあった。

ところで、現在までに刊行されているモンゴル語辞書類には、レッシング編集の定評あるモンゴル語・英語辞典や、内蒙古自治区でちかごろ編纂された『蒙漢辞典』のように、この両者を正しく区別しているものもある。

だが、日本の戦前期の代表的モンゴル語辞典『蒙古語大辞典』のように、「タルバガ」の項には中国語訳として「獼兎」、日本語訳として「タルバカン（露蒙国境付近ニ多ク産出スル鼠類ノ大ナルモノニシテ太サ兎ニ近シ。地下ニ穴居ス。毛皮ハ染色自由ナルヲ以テ重用セラル）」と的確な訳をつけているにもかかわらず、Alakdaga の項において、漢語訳としては「跳兎兎」と正確な訳語を付しながら、日本語訳として「タルバガン」と誤訳を登載し、混乱を生じてしまった例もある（下永・鈴江 1933: 62, 1157）。

似たようなケースは、近時刊行された『現代モンゴル語辞典』（大学書林）にも見られる。この有用なキリル（ロシア）文字表記（モンゴル国の文字方式）の辞典では、アラグダーガ（*алагдлага*）の項に「とびねずみ」と正鵠を射る訳語をつけながら、「野うさぎの一種」などと不要の誤訳を添えてしまった。中国で、トビネズミのことを「跳兎」と俗称するのに影響されたのであろうか（小澤 1983: 13）。

外国語辞書において、動植物の固有名詞を正確に同定し、翻訳することのむづかしさがうかがわれる事例である。

先に引用した『五体清文鑑』は清朝時代の編纂ではあるが、さすがに、タルバガンの項の他、*alakdahan* というモンゴル語を借用した満洲語を登載し、中国語としては「跳兎」をつけ、説明部分でも、「モンゴルの原野に産する。前脚が短く、後脚が長い。普通の兎よりも小さい」跳兎（実はトビネズミ）を正確に述べる。

前述の『蒙古語大辞典』が、的確な中国語訳を付していたのは、『五体清文鑑』をはじめとする清朝時代の語彙集を参照しているからであろう。

タルバガンにあてられる学名についても、いささかの錯綜が見られる。

Arctomys は、タルバガンの学名として、よく用いられていた呼称である。これは *Marmota* を呼ぶ際のいわゆるシノニム（別称）である。戦中期の日本で、「満蒙」と呼ばれた地域の動物名を同定する際によく依拠された森為三『満洲及東部内蒙古脊椎動物目録』（「京城」1927）は、タルバガンの学名を *Arctomys* としているし、中国で刊行された『新疆啮齒動物誌』の「旱獭」の項では、この学名を「異名」として掲載する。*Marmota* と *Arctomys*、いずれの呼び方でも、シノニムという趣旨からすれば誤りではない。今日では *Marmota* を用いるのが普通である。

かつて江上波夫は、タルバガンの「頭部及び前肢が鼠のそれに酷似し、後肢及び尾部に於いて兎の特徴を示すことから、沈括の『夢溪筆談』や李時珍の『本草綱目』の「跳兎に就いての記事と完全に一致」と言い、跳兎（この場合の「跳兎」はトビネズミを指すこと前述のとおり）をタルバガンと同定した（江上 1948: 213）。しかし、これが誤りであることは、前記したとおりである。

また、同氏の論考に根拠として引用されている『本草綱目』自体の中にも、すでに述べたとおり、別項に「土撥鼠」の記載が立てられており、そこには「蒙古人名荅刺不花」（モンゴル人は「荅刺不花」と名づける）と明記されている。『本草綱目』には、たしかに「跳兎」の記述があるにはある（巻51下、獣之3「鼠」付録「蹇鼠」の条）が、「タルバガン」も別項に登載されている。この文献は、比較的容易に見られる古典なので、もうすこし念入りに参照していれば避けられた誤りだった。

動物分類学上、タルバガンは齧歯目リス亜目リス科マーモット属に、またトビネズミは齧歯目ネズミ亜目トビネズミ科イツユビトビネズミ属に位置づけられる。前者はリス型齧歯類、後者はネズミ型齧歯類の動物で、両者には系統上の明瞭な区別がある。

タルバガンは、体長 60 cm 前後、体重は秋のよく肥った状態では 8 kg にもなる。尾長 10 cm あまり、太く平たいがっしりした体格をもつ。短い脚だが、鈍く曲がった黒い爪は非常に強く長く、土を掘るのに最適である。前肢の第一指はまったく退化しているか、1 節分をとどめるのみである。頸は短く両耳は立っており、裂けた上唇から大きな門歯をのぞかせている。毛は「淡黄褐色ニシテ毛根部ハ灰色、体側ヨリ背上ノ毛ハ尖端「チョコレート」色ナリ。鼻端ヨリ額ニ渉リテ濃褐色、尾モ濃褐色」（原・中山 1919: 275）である。

半地下生で、草、球根、塊茎などを食う。9月から4月ころまで冬眠する。冬眠の期間は、棲息地域によって相違が見られる。冬眠からさめてすぐ、交尾する。5月には3匹から6匹くらいの子を産む。

春から夏にかけて、タルバガンは旺盛な食欲を見せ、ひたすら食いまくる。それは主として朝と夕方であるが、餌をとるときも巣穴から遠く離れることはない。

太陽が昇ったあと、まず最初に1匹の大きなタルバガンが穴から出てくるが、それはグループのリーダーである。その1匹は、注意深く徐々に頭をもたげ、次第に穴から現われる。安全と見ると、穴のそばの土の堆積の上ののぼり、尾と臀部で身体を支えて、後肢で直立する。そして入念に四囲の状況をチェックする。小山の堆積の上で立ち上がるのだから、かなり広く、しかも的確に周囲の状況を知ることができる。後肢のみで立つ姿勢は、あたかも人間の立ち姿のようだ。後述するように、タルバガンの前世が人であるという伝承が、中央ユーラシア地域に散見されるのもうなずける。

地中に巣穴を作るリス科動物のいくつかは、この特徴を備えている。直立し、前肢を胸の前に重ねた礼儀正しい人さながらの挙措は、漢族からも注目され、「礼鼠」「拱鼠」などという呼称も生まれてくる。これは漢名「黄鼠」の異称で、ジリス属 *Citellus* (= *Spermophilus*) のハタリスを指すが、タルバガンも、これとよく似た動作をするのである。

それはさておき、こうしてリーダーが四方を展望し、安全だと判断されると、はじめて皆がぞろぞろ出てきて、食料を探したり遊んだりする。みんなが外に出たあとも、最初に出てきたリーダーはなお見張りをつづける。

天敵の襲撃など、さしせまった危険が察知されると、リーダーは鋭い警告の鳴き声をあげる。すると、外に出ていた群は、あっという間に穴へと走りこむのである。

日中を地上ですごしたタルバガンの群は、日没とともにふたたび穴中にはいる（ルカーシキン 1937; シトニコフ 1959; Луузаншарав 1960; Намнандорж 1964; ブーリエール 1976; Lubsang 1980; 王・楊 1983 など）。

タルバガンは家族が寄り集まって大きな群をつくり、地下の巣穴に集住する。各巣穴には、3ないし5家族、個体にして15頭ぐらいが集住することもあるという。

その巣穴は、実にユニークなものである。夏用・冬用の2つの巣穴がある。冬用のものは特に大がかりで、最大の特徴は、深くて、とても長いということにある。深さは170 cm 以上から4 m をこえるものまである。

寝室や貯蔵庫、さらには便所など、機能ごとに分けられた直径50 cm から1 m たちずくらしいの広さの部屋が、地下2~4 m ほどの深さの所に設けられている。

そうした部屋は、くねくねと縦横無尽に穿たれた、直径20~25 cm ぐらいの長いトンネルによって結びあわせられ、いくつかの出入口が地上に開かれている。

タルバガンの冬眠には、夏の間暮らしていた巣穴とは別の冬穴が用いられる。夏

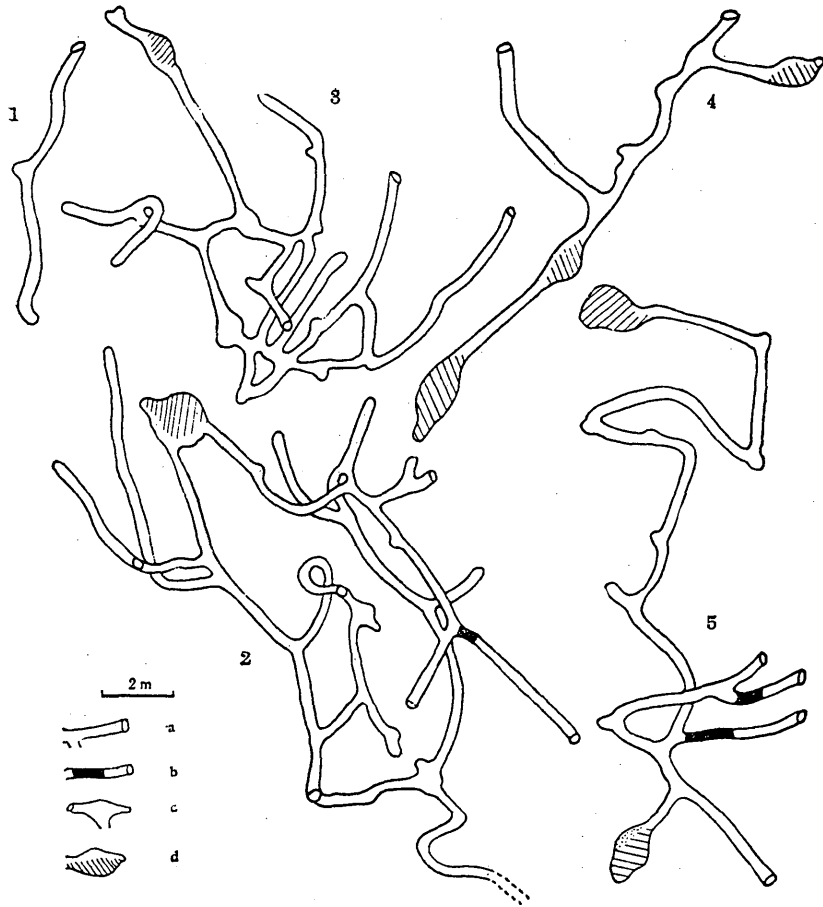


図2 タルバガンの巣穴 (平面図)。Marmota baibacina (「灰旱獭」) の例。[1:臨時の巣穴 2:夏の巣穴 3:冬の巣穴 4:5:夏冬兼用の巣穴。a:出入口 b:ふさがれた部分 c:ふくらんだ部分 d:巣部屋]。(王・楊 1983. p. 56 の図をもとに作製)。

穴の数家族が共同で冬穴に入り、冬眠するという。冬眠用の巣穴は夏のものに比べると、ずっと複雑な構造となっている。

巣への出入口は外部からふさがれ、残された唯一の穴から全員が冬眠のため冬穴に入ると、土砂と糞尿をこね合わせてトンネルに栓をする。長いものは1.5mにもわたって詰められるが、ミミズが作る土塊に似ており、あまり密ではないので、多数の細孔で外界と通気できるようになっている。

冬穴の寝室には冬眠するときのために、揉みつぶされた香りの強い柔らかい草がふわふわに敷き詰められている。ロシア人猟師たちは、この草をポーリン (полян) と呼ぶ。

と呼んでいる。「ポウリン」とは、「高サ四五尺ニ及フ雑草ニシテ小サキ白キ花ヲ開キ満洲里付近到ル処ニ繁茂ス、此ノ草ハ蚤ノ発生防止ニ向テ意義ヲ有スル」という（飯島 1921: 672）。また、雨水が穴のなかに侵入しないよう、トンネルは S 字形に作られている。

1 匹のタルバガンが、延長 60 m のトンネルを掘るのはふつうのことである。

そうすると、1 匹につき運び出す土砂のかさは、1~2 m³ にもなる。そして、完成された多機能の巣窟の総平面積は、1 セットで小さくて 30~50 m²、大きいものでは 500 m² に達することもある（ブーリエール 1976: 87; 王・楊 1983: 54）。

このように大規模な巣穴を開鑿する際には、当然大量の土石が地底深くから掘りあげられることになる。その結果、タルバガンの巣のまわりには、饅頭のような形の小山が見られる。この小山はブタン (buta (内蒙大蒙語研 1976: 494), モンゴル語で「くさむら」あるいは「土の小さい堆積」の意) と呼ばれている (ルカーシキン 1937: 12-13)。ごくふつうの物で、高さ 1 m 以上、直径 3~4 m くらいの大きさがある。

タルバガンの棲息地域に行くと、こうした土砂の堆積があたり一面に見られる。居住環境がよいところではコロニーは大規模になり、巣穴は 50 から数百にものぼる。

タルバガンの巣穴は数世代にわたって使用される。春になると (また冬眠に入る前には)、穴の清掃を行い、古い敷き草やもろもろのくずを地表へ運び出す。こうして巣穴は、日頃からじつに几帳面に管理され、修理され、模様がえされている。

I-3 タルバガンを実見した日本人たち

福島安正

1893(明治26)年、日本の朝野は、陸軍軍人福島安正のシベリア単騎横断成功の大冒険談に沸きかえった。情報将校としてはやくから名をはせていた福島は、前年の紀元節、ベルリンを出発し、厳冬期のシベリアを終始騎馬で横断し、日清・日露両戦争前夜のシベリア、ロシアの状況をつぶさに実見したのであった。

彼を迎えた日本の熱狂ぶりはたいへんなものであった。各種の横断記の出版をはじめ、新聞や雑誌が競って取りあげたのはもちろんだが、美しい木版刷りによる錦絵や双六、さては引き札、石版画や銅版画による横断中の「名場面」の想像再現図、当時大衆演芸の花形としてもはやされていた講談や壮士芝居にまでとりあげられたのである。ありとあらゆるメディアが、この稀有の話題に集中した観がある。

『大阪朝日新聞』は、花形記者西村天囚(時彦)による福島からの「数旬」にわた

る「道途の見聞」の談話聴取をもとに、120回に及ぶ旅行記を連載した。著作権という発想自体が稀薄な時代、玉石混淆もただならざる関係著書との相違を、西村は巻頭「凡例五則」において「此の編、中佐の口に出でて而して予の耳に入り予の手に成る、世の展転伝聞謬を伝え、虚を吠ゆるの類に非ず。且つ一回成る毎に必ず中佐の閱を経て而して印刷に付す」と主張する。なるほど、西村の自負のとおり、公刊された類書の中では最も浩瀚なものとなっている。

ともかくも、この長大な連載記事をまとめて単行された同書によれば、福島は、1892(明治25)年10月20日、モンゴルのウリヤスタイから庫倫に向かう途上、「穴鼠」を見たという。記述は次のごとくである。

野には草少なく砂多し。砂磧の上、処々に小穴あり。是れ穴鼠の居なり。穴鼠の大きさ尋常の鼠と異ならず。其の穴を穿つこと、太だ巧に、穴中に階あり。樓の如く中に土柱を作りて障壁を為し、以て群鼠分居の処と為す。其結構の密なる殆ど人工を匠す。其の穴口二寸許、以て出入りすべし。各穴相距る数弓、同族往来以て楽しむ。往来の道、分明に跡を印し、縦横相通ずること、殆ど輪痕の如し。人馬偶至り、穴鼠倉皇道を誤れば、忽ち穴口を失ひて道上に彷徨す。然れども其足尤も疾く、捕捉す可からず。中佐途上屢之を見るを得。其形米国の草原^{プレーリー}狗に似たりと云ふ。

蒙古の犬好んで穴鼠を食ひ、又巧に之を捕ふ。此の日途上又屢穴鼠を見る。婦人牽く所の犬、馳逐捕捉、旅途の奇観なりけり。其の之を捕ふるや、或は穴鼠の道に迷ひて彷徨するを逐ひ、或は草間岩側に潜伏して其の將に穴口に入らんとするを待ち、一躍して之を掴み、牙を鳴らして之を食らうとなり。(西村 1894: 229)

これが、19世紀最末期における、管見の及ぶ限りでは、日本人最初のタルバガン実見記事である。記事はすこぶる詳細である。かなりの部分、実に具体的であり、正確でもある。この時期すでに、アメリカ西部の草原地帯に住むプレーリードッグとの類似を指摘しているのも特筆すべき点であり、総じて実見した者でなくては描けない内容もふくまれている。これが、日本人がタルバガンを見て、そのめずらしい生態を詳しく記述した最初の例といえる可能性はかなり高い。

ただ、大きさが「尋常の鼠」と変わらないというのは、かなり大きな誤りである。プレーリードッグに似ているという的確な記事にも矛盾している。10月20日という時期も気になる。この地方で、この時期であれば、通例タルバガンはとっくに冬眠しているはずだからである。一般的な観察をこのときにまとめて書いているのか、あるいは、この年は、この時期まだ冬眠に入らなくてよいような気候のめぐりあわせだった

のだろうか。

鳥居龍蔵・鳥居きみ子

さて、この福島のモンゴル域内通過より15年ほどのちの1908(明治41)年の初夏、家族をともない、モンゴル地域への調査旅行をしていた鳥居龍蔵は、興安嶺山地地域の東ウジュムチンで、多くのタルバガンを眼にした。

鍛えぬかれた人類学者の観察は正確で微細にわたる。この時の見聞は『蒙古旅行』という書名のもと、1911年に博文館から出版されることになる。この本にもタルバガンの生態に関する詳細にわたる実見談がある。

のちに述べるように、1910年から、急速に、かつ組織的にタルバガンについての研究が進む(進まざるをえない)事態が起こるのであるが、鳥居の記述は、その直前にあたることとなる。

ともあれ6月7日と、同11日の鳥居の日記に見えるその描写を要約することによって、この動物の生態を概観してみよう。

タルバガ(鳥居はタルバガンをこう呼んでいる 筆者注)は土鼠の類で、大きさは猫ぐらい、狸に似ており鋭い牙を持つ。穴を掘ってそのなかに暮らし、草の根を食べる。穴の外のとこで下肢で座り、前脚を挙げてまるでカンガルーのような格好で立つ。キキという鳴き声を発する。

東ウジュムチンには無数に住んでいるが、西ウジュムチン方面では全く見られない。その巣穴は非常に巧妙に作られ、出口は1つの巣に必ず3、4の出入り口を持つ。一方から追っても、他の出入り口へ逃れられるようになっている。

この動物が繁殖すると、草の根を食い尽くすので牧草が生じなくなる。そのため牧畜に大打撃を与えてしまい、それだけによって生活するモンゴル人にとっては大打撃である。昔モンゴル人はこれを食用に供していたが、今は食べない。もっともこの付近では食べているようだ。(鳥居 1975: 162)

みずからの目で実見したことと、伝聞したことが、明瞭に区分けされたうえで述べられている。先にも述べたように、鳥居も詳細な記事のなかで、タルバガンの学名をとりちがえていることからすれば、福島の記事もあまり厳しく攻撃することはできないかもしれない。そうすると、やはり、日本人として、最初につぶさにタルバガンを実見し、記録した功績は福島安正に帰すべきかもしれない。

さて、このとき同行した夫人の鳥居きみ子も、その旅行における見聞を『土俗学上

より観たる蒙古』に記録している。この旅行記には、女性ならではの観察が随所にあられ、夫龍蔵の紀行文にまさるとも劣らぬ、まことに興味深い貴重な記録となっている。タルバガンについても、強い印象を受けたらしく、6月8日の記事に言及されている。

今日過ぎる五十清里許りの間、此動物が穴を掘ったために、盛り上げた小山ばかりの土地になって居ます。それ等の居る所には、家畜を放牧することは出来ません。(中略) 曠漠たる処一面に二三尺位高さに土を盛り上げ、其上に栗鼠の様な形をして立上がつて、キャッキキッと鳴いて居る様子は、実に陰惨な感じがいたします。此動物は非常に繁殖力の強いものであって、多く棲まわって居る所は、人が棲むことも出来ないし、殊に家畜が飼はれなくなります。(鳥居きみ子 1931: 458-459)

また、夜寝るときも「いやなタルバガの声がきこえて来まして、気持の悪い一夜でありました」と、あまり好意的な記述をしていない。

鳥居きみ子は、6月10日の記録において、モンゴル人がタルバガンの肉を食べるそうだと、も言っている。きみ子はタルバガンをハルブーとも呼ぶと言っているが、また「タラカ」という略称もあるという。

モンゴル人が連れていた「非常に強い焦茶色の蒙古犬」が、タルバガンを発見し、穴に入らないうちに追いかけてまわして、ついにくわえて来たとも述べている。鳥居らは、それを回収して携えて行くのである。福島同様、イヌがタルバガンにとって恐ろしい敵となっていることを十分に窺わせる記述である。

タルバガンを狩る猟具にも観察は及んでいる。「径一寸位の棒の長さ二尺位で、先端に分銅の如き重い金属製のものを二寸位皮紐で垂下させた」のを腰にさしておき、タルバガやウサギなど、走っている動物に狙いをつけて投げつける。モンゴル人たちが、この「ブーメランの様な」猟具を巧みに使うことに感心している。鳥居らが見たものは、モンゴル語でジャロー（棍棒の意）、bilayu（布魯棒）（内蒙大蒙語研 1976: 458）と呼ばれている、よく知られた猟具である。ただし形状こそ似ているが、ジャローは、ブーメランのように投じたあと、手もとに戻ってくるということはない。

このときに、きみ子は「今日もまた 高原の野に行きくれて 月影寒し タルバガの声」と和歌を詠じている（鳥居きみ子 1931: 463, 465）。

格別餌などを与えられることのないことのほうが多いモンゴルのイヌは、草原にいる齧歯動物などを捕食して自活しなければならぬ状況に置かれることもあったよう

で、タルバガンはまさにおあつらえ向きの獲物であった。タルバガンにしてみれば、天敵は、オオカミ、夜中に巣穴の中にまで入り込んできて襲いかかる兇悪なイタチ *Mustela*、イヌワシ・オジロワシなどの猛禽だけではなく、むしろ様々な手段を駆使して捕らえにくるイヌ、そしてなによりもヒトが破滅的なダメージをもたらす存在だったことは確かである。

タルバガンは並外れた好奇心をもっているが、それにつけこんで捕殺しようとするのは、ヒトだけではない。狼はタルバガンの主要な天敵であるが、この猛兽もやはりこの種の猟法をこころえているようである。モンゴルの猟師の伝えるところによると、狼は2頭一組となってタルバガンに対するという。すなわち、1頭がタルバガンの前方で頭や尾を激しく振りながら、いかにも楽しそうに戯れるような体であちこち跳び回る。これはいわば陽動作戦で、タルバガンの注意をそちらへと集中させてしまうのが狙いである。この間にもう1頭が、ひそかに背後から忍びより、機を見てタルバガンに飛びかかって噛み殺すというものである。まさに、死に至る好奇心をタルバガンは持っている (Lukashkin 1938: 72)。

Ⅱ タルバガンの経済的価値

Ⅱ-1 タルバガンの利害得失

タルバガンたちは、習性として、孜々として地中に穴をうがう。それによって、草原の水土が流失してしまい、牧畜環境に重大な影響が及んでくる。そしてそれよりもっと大きい問題として、家畜にとっての貴重な牧草が、この小獣の主な食料（主として根の部分）でもあるという事情がある。このように、牧民にとってのタルバガンは、草原を穴だらけにし、牧草を家畜とあらそう悪しき存在である。これは、タルバガンをめぐる言説の多くによく見られる記述である。

また、この動物が草原に無数に穿った穴に、馬が脚をとられ、思わぬ事故が起こるといふ言及もしばしば見受けられる。これらの説は、一見もっともらしく思われるし、またいかにもありそうなことである。

だが一方で、それを俗説として否定する指摘もあるということを、あわせて述べておかないと公平ではないだろう。

たとえば、1919年、中央アジアを探検したアンドリュースは、こういつている。馬で草原を疾走しているときでも、平原に点々とある巣穴を馬に避けさせようとしなく

てもよい。なぜなら馬は乗り手よりもよくその穴を見ることができるし、その穴が死を意味するものだというを「命全体で」知っているからだ、と。アンドリュースは、次々に目に飛びこんでくるタルバガンの穴に、馬上で肝を潰していたのだが、馬はそのたびに「猫のようにそれを躍り越え」ていったのである（アンドリュース 1941: 135）。

北アメリカ大陸に棲息するもっとも著名なジリス（地上生のリス類）であるプレーリードッグについても同様の「迷信」が存在するという。近辺の牧場主たちは、その動物が草原の草を食べること、たくさんの穴を掘ることから、大事な家畜の牧草を奪う、家畜が穴にはまって脚を折る、という考えにとらわれ、大規模な駆除が何度も実施されたのである。プレーリードッグの密着調査をしているメリーランド大学のジョン＝ホグランド教授によれば、プレーリードッグが常食とする草の種類は牧草とは別のものであるし、「穴については論外。家畜だって人間と同じ。穴に落ちないように歩きます」ということである。実際に、牧場主にインタビューしてみても、自分の家畜が穴で骨を折った経験をした人がいたわけではなく、穴で骨折したという説は「友達から聞いた」という回答が多かったという（岡崎 1990: 56）。

また一方では、穴を掘るという、まさにタルバガンの最も特徴的な行動によって、草原の活力が保たれているという学説があることも指摘しておこう。

深く巣穴を掘ることによって、表土とは異なる成分の土壌が地表に搬出されることになり、その結果、その場所にいろいろな種類の植物が生育することが可能になるのである。タルバガンが掘りあげた塚の上に生育する植物と、その周囲の地表のそれとは明らかに異なる傾向にある。すなわち、この精力的な穴掘り屋の本能が、草原の植生を多彩なものにし、さらには草原の土壌の生命力を維持することにつながっているのだ（ブーリエール 1976: 87）。

穴を掘るというタルバガンの行為には、このように、まったく相反する評価がなされる。

また牧民（と家畜）に、タルバガンがある種の貢献をなす場合もある。タルバガン独特の音声コミュニケーション、特にその鋭い警告の叫びによって、家畜の群にひそかに忍び寄って来るオオカミの存在をいちやく察知しうるというのである（ルカーシキン 1937: 21）。

II-2 タルバガンの用途

この動物はその棲息地である高原性の草原地帯のそこここで、その姿をよく目撃さ

れている。今も述べたように、タルバガンが、害獣と見なされることもよくあり、また後述するように、人間に深刻な災厄をもたらす事情さえあるのに、その存在を許され、殲滅されることをまぬがれているのはなぜか。タルバガンが、自然資源としての貴重な価値を持っているからだ。その様子を見てみよう。

遊牧民に少なからぬ被害を与え続けるかに見えるタルバガンには、珍重すべき用途があった。タルバガンは、食肉や油脂、とりわけ毛皮の原料を供給しているのである。

毛皮材料としてのタルバガン需要については、のちに詳しく述べることになるので、ここではその他の用途について見ておこう。

まず食用。古い史料にはこの動物を食用にすることが記録されている。例えば、『秘史』にこの種の記事が見える。チンギス=ハーンの一代記を主要な部分とするこの書は、かなりの程度、文学性に彩られていて、当時のモンゴルの人々の思考方法や生活情景がよく描かれており、貴重な史料・民族誌として高い評価を受けている。

『秘史』に見えるタルバガンにかかわる記事を見てみよう。

幼時のチンギス=ハーン、テムジンは、父を敵対する部族に毒殺されて失い、父が従えていた部民にも逃げられ、敵対部族の襲撃をこうむったりと、次から次へと過酷な運命に翻弄され、困窮の極にあった。

そのとき、彼ら一家は「タルバガンやグチュグル」を殺しては食らっていたと書かれている（第89節・巻2）。かたわら、野生の牛蒡、蕪や人参の類、その地に自生する果物を採取したり、あるいは河で捕った魚なども食料となっていた（第74、75節・ともに巻2）（村上 1970: 107-109, 140）。

グチュグルには、「野鼠」という傍訳（逐語訳）が付されている。

このくだりは、見すてられたテムジンら母子たちが、艱苦にあえいでいたときの描写である。遊牧の民にとって命の綱である畜群を奪われた者が、かろうじて生活をなりたせうる手段の1つが、比較的簡単に行える齧歯動物の狩猟だったのである。

漢文史料のうち、最も詳細にこの動物のことをとりあげた最初の文献は、先にもふれた元代の1330年、忽思慧の撰になる『飲膳正要』であろう。この書物は、その序に著作の目的を「口体を養い、徳を養う」というごとく、中国特有の飲食保健理論をあつかう。この書のタルバガンに関する記載を見よう。

一名を土撥鼠という。味甘、無毒。野鶏瘵瘡を治す。よく煮て食べると人体によろしい。山後草沢の中に生きる。北方の人は巢穴から掘り出して捕らえ、食べる。よく肥っていても煮ると油濃くないスープになり、無味である。食べすぎると消化が悪い。微かに気を動

かす。

皮をなめしてオーバークートや敷皮を作ると湿気をとおさず，たいへん暖かい。

頭骨は，下あごの肉を取り除く。歯は完全なままにしておく。小児が眠らないのを治す。小児の頭のそばにこれを掛けておくと，眠らせることができる。(忽思慧 1993: 173-174)

実に詳細な記述である。多彩な用途はもちろんのこと，一定の箇所の肉を除去することを記していることにも注意すべきである。

モンゴルの名物料理としてよく知られた「ボードク」は，焼けた石を利用したタルバガン料理である。19世紀の最末期，モンゴルを訪れたラムステッドが詳しくその料理法を記録しているので，次に要約しておく。

捕らえたタルバガンの首を切りおとし，皮と肉の間に指を入れ，ぐるりと皮を剥く。腸を切りとって，肉を適当な大きさに切る。裏返しになった皮をもとにもどし，その中に熱した石と必要なだけの肉を入れ，先ほど切りとった腸で袋の口をしっかりと縛って待つ。毛がたやすく取れるようになると，中にある肉もすっきり蒸し焼きになっているはずだから，口を開いて脂ののった肉と濃い肉汁を賞味する。鍋も水もない草原で，このように肉を調理して食べる (ラムステッド 1992: 76)。

この焼石による蒸し焼き料理法は，現在でも見られ，1987年モンゴル人民共和国を訪れた開高健も，草原で調理のさまを目にしている。この場合は，タルバガンの皮を包皮として用いず，空いた牛乳缶のなかに肉と焼けた石を交互にほうりこみ，ふたをして焚き火のそばに置いたという (開高 1989: 37)。

これも，やはり，ボードクと呼ばれるというが，その動物の皮袋ではなく缶などを用いるのはホール hog ということもある (三秋 1991: 104)。ほかにも，漢人たちは野生のネギとまぜて肉団子として食べるといい，ザバイカルのロシア人たちは，タルバガンの肉を樽に入れ，塩漬けにして貯蔵していたという。脂肪分に富むその肉の味のほどは，評価がさまざまで，子豚の肉に負けないおいしさという猟師もいれば，兎肉の味ににているという者もあり，土くさくて沢山は食べられないという評もある (ルカーシキン 1937: 42-44)。タルバガンの食肉としての意義は今に至るも変わらず，モンゴル人はさまざまな方法によってこれを捕らえ，その肉を食べている (吉田 1981: 146)。

さて，タルバガンは，冬眠前になると，夏の季節に食いに食ったおかげで，早く歩くことができないほどに肥満する。このころの歩きかたは，大きな垂れさがった腹を引きずるようだという。なにしろ，その体だけを頼りに長い冬眠生活を乗りきらねば

ならないのだから、タルバガンにしてみれば、いくら肥っても肥りすぎということはないのかもしれない。事実、タルバガンが春になって冬眠から目ざめたとき、秋のみごとな肥満体は、脂気をなくした見る影もない姿となりはてているのである。

秋に7,8 kg くらいにまで肥満したタルバガンには、普通2 kg ほどの脂肪があるという。この脂肪は良質で、溶かしても決して混濁せず、厳寒期にあっても硬化することがないといわれる。また、浸透性が非常に高いので、ガラスの容器に入れておかないとしみ出してしまうほどだという。だから、皮革・革紐などの手入れに塗布される。煮た脂肪は食用となり、揚げ物などの際に用いることがある。

医学用としては、チベットやモンゴルなどにおける伝統医学（いわゆる蔵医、蒙医）において、ひとしく利用する。リュウマチや、火傷、さらには凍傷の薬として、また咳や肺など胸の病いにも用いるという（Lubsang 1980: 1276-1280）。

旭鷲山、すなわち1990年代後半の大相撲界において、おおいに名をあげたモンゴル国（西部のホブド）出身のダヴァーニャットバヤルの手記によれば、冬の寒さがことのほか厳しいモンゴルでは、寒さで子供が風邪をひかないように、牧民の間でよくおこなわれる「タルバガン療法」があるという。夏の間、馬乳酒をたっぷり飲むこと、体に馬乳酒やタルバガンの油を塗って、よく日焼けさせるというものである。1995年夏、故郷に錦を飾った旭鷲山は、3日間にわたって、この民間「療法」を施してもらったという（旭鷲山 1997: 144）。

タルバガンが、鉱脈を探し当てる手がかりをもたらしこともある。少なからず意表をつかれる話であるが、そのプロセスは次のようなものである。

つまり、この獣が、巣穴をつくるために地中から掘りあげた土が、地中に横たわる鉱産資源の現物をふくんでいたことから、発見につながったのである。ジャライノール炭鉱、満洲里郊外のモンゴリスキー炭鉱、ザバイカルのハラノール炭鉱、同じくタルバガタイスキー炭鉱などは、そのようなきっかけで発見されたという（田中 1934: 78）。土を掘りさげ、地中の巣穴で棲息する動物が、この種の役割をはたす例は、ローマ帝国時代の大地理学者ストラボン（前64-後64年）の『地理書』にも見える。東のかた、インド人が住む高原地帯に、冬に穴を掘り、穴の口のまわりにモグラのように土を積みあげる、狐より小さくない動物「蟻（ムルメータス）」がいる。その掘り出した土の中に砂金が含まれている。その砂金は精錬する必要もないほど純良である。砂金取りの人たちは、「蟻」を餌の肉片で巣穴から遠ざけ、そのすきに砂金を採取する、というのである（相馬 1972: 32）。この話題は、前述した江上波夫の、タルバガンについて言及した論考をめぐって書かれた相馬隆の論文の中に引用されて

いるが、相馬は「蟻」がタルバガンと思われる鼠であるとしている。この獣については、ヘロドトスの『歴史』のなかにも記述があり、そこでは「無人の砂漠地帯」に棲息し、「イヌよりは小さいがキツネよりは大きい」と言われている。ヘロドトスを邦訳した松平千秋は、この獣を「多くの資料を総合して判断すれば、野生のモルモットの類らしい」と判断する（ヘロドトス 1967: 159）。

すでに検討したように、江上の比定には誤解があり、相馬論文を読む際にも、その事実を念頭におかなければならないが、西方世界においても鉱物資源を掘りあてるはたらきをする穴居の小動物がいることが知られていたことは明らかである。

Ⅲ 民話に見えるタルバガン

Ⅲ-1 エルヒー=メルゲンの物語

タルバガンは、その棲息地において、共生する牧民たちから、ひとかたならぬ注目を集めていた。おそらく、オオカミとならんで、野生に属する動物として、牧民たちに最も強く意識されていたといえる。

そのことは、タルバガンをめぐる興味あふれる民話が、いくつかあることから想像できる。モンゴルの代表的な民話としてよく知られている「エルヒー=メルゲン」は、タルバガンという動物の由来を物語ったものである。なお、メルゲンとはモンゴル語で、聡明なさまをあらわす形容詞・名詞であるが、元来は善射者、弓の名手をたたえる称号であった。

太古、太陽は7つあった。たえがたい暑さで大地は赤く焼け、河は干上がり、植物は枯れ、家畜も倒れて、人々の難渋はその極に達していた。

その頃、エルヒー=メルゲンという射れば必ず射あてるという勇者がいた。みずから恃むところが大きかったエルヒー=メルゲンは、誓いをたてた。「7つの太陽を7本の矢で射落とそう。もししくじったら、俺は親指を切りおとし、人間であることをやめ、水を飲まず、草を食わぬタルバガンとなって暗い土中で暮らそうではないか」。

彼は、東西に1列に並んだ太陽を言葉とおりに、次から次へと射落としていった。そして最後の太陽に狙いを定めて矢を放とうとした刹那、1羽のツバメが矢筋に入った。だが矢は弦を放れてしまっており、太陽に向かって飛んだ矢はツバメの尾を射た。そのため、ツバメの尾は、ふたつに裂けてしまった。その隙に、最後の太陽は、まんまと西の山の向こうに隠れてしまった。

怒った彼は、ツバメを追うべく愛馬にまたがった。はやる駿馬は、主人同様誓いを立てる。「もし追いつけなかったら、私の前脚を切りすてて下さい。そうなったらもう私は馬ではなく、大地のくぼんだところで暮らすでしょう」。

しかし馬は、その言葉とはうらはらに、1日中走ってもどうしても追いつけなかった。エルヒー=メルゲンは、カッとして馬の前脚を切りおとした。馬は前脚が極端に短いトビネズミに姿を変えた。エルヒー=メルゲンもまた、誓いのおりみずからの親指を断ちきり、タルバガンとなった。だからタルバガンの脚の指は4本なのだ。

また、弓の名手だった彼は、タルバガンになったことも忘れ、日のあるあいだは、穴の外にいて太陽を狙っている。

タルバガンには、脇の下に「人の肉」という部分があって、その肉を食うことが戒められているのは、それがエルヒー=メルゲンの肉だからである。(ツェレンソドノム 1981: 304)

タルバガンや、そのほかの草原に棲む動物たちの、姿態や習性などの起源を説明しようとする興味深い伝承である。

矢を放つとき、エルヒー=メルゲンは誓いの言葉を発して、失敗した場合にはみずからの親指を切り落とすと知っているが、これはモンゴルの英雄叙事詩において散見される、弓の名手が弓射の際におこなう誓詞である。

この種の誓詞は、古くは『秘史』にも見られる。チンギス=ハーンの後継者問題がおこったとき、長子ジョチに対して弟チャガタイが兄出生時のスキャンダルを言挙げし、2人のあいだに深刻ないさかきがおこる。その際ジョチは、「おまえ(チャガタイ)に弓で負けたら親指を切っておとそう。とっくみあいでも勝たれるようなら、倒れたところから起きあがらない」と、草原の勇者としての自負心と闘争心をむき出しにして言い放つのである(第254節・巻11)(村上 1976: 172-173)。

タルバガンの前肢の拇指は完全に退化しているか、1節の指骨のみを存するのであるが、そのことに周知の伝説のプロットを巧妙にあてはめているのである。

エルヒー=メルゲンの愛馬の、速さで負けたときに前脚を切り落とすという「体をはった」誇り高い誓いも、しばしばモンゴルの英雄叙事詩に現われるものである。

タルバガンの肉が人の肉に想定されるのは、それが常時示す、立ちあがる姿勢を人間に見立てているからであろうといわれる。ともあれ、牧民たちの、周辺の自然に対する細やかな観察眼が、じかに伝わってくる思いがするストーリーである。

食用とする際の部位にまつわるタブーについては、先に引用した『飲膳正要』の記述にもあったことを想起すべきである。

Ⅲ-2 弓の上手なタルバガンの物語，そのほか

また，こんな話もある。それは，1930年代，ハルビンの旧東省文物研究所博物館の館長であったルカーシキンが，ブリヤート=モンゴルの人から聴取したものである。

はるかな昔，モンゴルの貧しい牧民の家に仏陀の化身である男の子が誕生した。この上ない慶事であったので，おびたしい人たちが詰めかけ，盛んな祝福や法要が執りおこなわれた。

そのあとは，モンゴルのこうした際のお決まり，ナーダム（エリーン=ゴルバン=ナーダム。モンゴル語で「ますらおの3種の技」の意。すなわち弓射・相撲・競馬）のはじまりである。

参加者のうち，タルバガンという若者があらゆる競技の勝者となった。勝者を祝う宴会が何日も続いた。勝ち誇ったタルバガンは，羽目を外して酒に酔いしれ，自慢の弓矢の腕前を誇った。

仲間の1人が，これもしたたかに酔っぱらい，「それなら自慢の弓でツバメを射止められるか」ともちかけた。ツバメは当時，春と暖かさをもたらす神聖な鳥とみなされていたので，タルバガンは，その言葉に驚倒せんばかりであった。

しかし勝利に酔った自負心が，この罰当たりな申し出を受けいれさせた。

そのころのツバメは尾が鋤のように広がった。ちょうどそこへ飛来したツバメめがけて，タルバガンは狙いを定め矢を放った。ツバメは悲痛な鳴き声とともに飛び去り，仏陀の足もとに墜ちた。

仏陀は聖鳥をあやめるという大罪を犯したものを引とらえよと敵命した。稲妻とともに雷はとどろき，ものすごい暴風が吹き荒れ，ひとびとはおびえきって家に逃げこみ，ひたすら仏陀に祈った。タルバガンは仏陀の前に引きすえられ，平伏した。

仏陀は，タルバガンに祭を汚した罰をくだす。「これからは地下に棲み，1年の半分は太陽を見ずに暮らせ。おまえがツバメにしでかした罪の報いは，人間によってなされるだろう。いつの日か，この国に異邦人が現れ，民をしいたげるとき，おまえは手練の弓矢の技で闘え」と。

タルバガンは，たちまちのうちに小動物の姿になりはてた。

タルバガンが鳴き声を発しながら，巣穴のわきの小山に立っているのは，近くにいる人たちに仏陀がいつ呪いを解いてくれるのかという問いを叫んでいるのだ。

また仏陀は，タルバガンの矢を避けえなかったツバメにも，罰として，裂けてしまった尾を，そのままの姿で残したのである。（ルカーシキン 1937: (補遺) 1-3）

タルバガンがもと人間であり，しかも弓矢の名手であるという要素が，ここでも強

調されている。細かく観察されたタルバガンの習性が、十分に物語に採り入れられているのも先の物語に共通する。

先の話の中にも出てきた燕の尾が裂けていることについてのプロットについては、別に、ベトリの採録になるブリヤート=モンゴルに伝承された火の起源説話と結びつくストーリーもある。すなわち、ツバメが、人間のために神々の世界からかまどの火をくちばしにくわえて運んできたのだが、神の知るところとなり、尾に一撃を受けて裂けてしまうというものである（ウノ=ハルヴァ 1971: 209）。食肉の部位タブーは、この話には見られない。

もうひとつ、例話をあげる。

タルバガンは、昔、弓矢で人間を殺しては食べていた。ブルハン（「仏さま」の意）は、そのさまをごらんになってお怒りになり、タルバガンの親指を切り落として弓を射れないようにし、さらに鎖骨と肩胛骨も使えなくしてしまった。

しかも、その身を今後は獲物となるようにと誓わせた。しかたなく、タルバガンは、「草を食わず、水を飲まず、地面に穴を掘り、猟師を困らせよう」と誓い、大地に穴を掘り、その中へ入ってしまった。

ある時、猟師がタルバガンを射ると、タルバガンはその矢を持って穴の中へと入った。猟師は仲間助けをたのみ、皆で穴を掘りかえしてみると、穴の中に矢をかかえた3歳の男の子が座っていた。

そのとき以後、タルバガンを矢で射殺すことは禁じられた。

また捕らえたタルバガンを解体するとき、その鎖骨を「人骨」、上腕骨にある桃色の肉は「人肉」と呼び、腎臓わきにある少しばかりの肉は「人の腎臓」と言って、注意して取り除け、決して食べないようにしたという。

これは、タルバガンがその昔、人を殺して食っていたので、その体内に人間の体の一部が残っているからと信じられたゆえのことである。（ツェレンソドノム 1981: 304）

ここでも、人との関連が主要なモチーフとして盛りこまれているし、拇指への言及もある。また弓の使い手であったという点も前話に通じるものがある。なにより注目すべきは、食肉部位のタブーが、さらに具体的になっていることである。

これらの話を検討してみると、モンゴル（やその周辺）の人たちのタルバガンに対する興味のありようが、いろいろと浮かびあがってくる。

第1にタルバガンと人間との強いつながり。そのなかには、その前身が弓を得意としていたこと、タルバガン肉の食用部位のタブーが強調されていることなどがあげら

れる。この食肉部位のタブーは、人とタルバガンの関係から見て、きわめて深刻な意味を持つ。そのことは、のちに述べることになるだろう。第2にその姿、習性にかかわること。拇指を失った（ように見える）4本の指、立ち上がる習性、地下における生活への興味など、細部に及ぶ。タルバガンが、いかほど詳細に観察されていたのか理解できるであろう。

Ⅳ タルバガン狩猟

Ⅳ-1 ベルグテイのタルバガン猟

では実際、タルバガンはどのような技法によって捕らえられるのか。そのあれこれを仔細に見て行くと、人間が動物を狩猟する際に案出する知恵がいかに多様か、また実に平凡なものから奇抜なものにまで及ぶのか、つくづく思い知らされる。まず古い時代の記録を見てみよう。

『元朝秘史』の、テムジン一家困窮時期の記事として、テムジンの異母弟ベルグテイが、馬に乗ってタルバガン捕りに行き、日が落ちてから獲物のタルバガンをぶらさげた馬を徒歩で牽いて帰ってきたというくだりがある（第90節・巻2）。

『秘史』に用いられている中世モンゴル語には、今に伝わらない言葉が多く、一つの語をめぐってさまざまな学説が提示されることがある。ベルグテイが、タルバガンを持ち帰った姿の描写もその一例である。niqsaqaljatala というのが、問題の言葉である。-tala は、動詞語幹に付いて、限界の意をあらわす副動詞語尾である。どの訳者も翻訳に大いに苦心している。

手がかりは、『秘史』構成上の一大特徴である、明代になって付された「傍訳」である。その逐語訳には、「顛動着」（震えおののきながら）とあるが、これではこの部分の解釈には適切でない。明代はじめに「傍訳」を付すとき、すでに、この言葉は意味不明の古語となっていたのかもしれない。では、現代の訳者たちの解釈はどうか。

たとえば、馬にタルバガンを「荷駄けて、ぶらんぶらんとさせながら」（村上正二訳）（村上 1970: 140）、あるいは、「駄してびっしり積みきれぬほど」（小澤重男訳）（小澤 1985: 159）と、この部分の訳には大きな開きがあるのだが、その「ぶらんぶらんさせながら」、「びっしり」に相当する言葉である。

ついでに述べておくと、小澤は、さらに「びっしり山積みになっている状態が馬の歩行に伴って、その背上で上下する状態を表現したものであろう」と補足している（小

澤 1985: 162)。

明治期、『秘史』の世界最初の学問的訳注を刊行した那珂通世の『成吉思汗実録』を見ると、「土撥鼠を荷つけて、身を揺がしつつ歩み、牽きて来ぬ」と訳されており、揺れているなにかは、荷物（捕らえたタルバガン）ではなく、馬を牽いているベルグテイの歩むさま、という解釈となっている（那珂 1907: 67）。小林高四郎は、同じ箇所を「獲物を駄けて、揚々と馬を牽いて来た」とし、注して「身を揺り動（か）し揚々との意か」と、那珂と同様の解釈をしている。つまり、これらは、村上や小澤の訳とも異なる解釈である（小林 1940: 42）。

また、世界的なモンゴル学者クリーブスの英訳では、come [back], leading [it] on foot, so that they swung to and fro（[[馬を] 牽いて歩いて [帰って] きたので、それら（もちろんタルバガン）は前後に揺れた）としている。前後に揺れたのは、「馬の歩みにつれて」であると、注釈を施しており、これは村上の解釈と軌を一にする（Cleaves 1982: 29）。

nīqsaqaljatalaが、人の歩むさまなのか、積まれた荷物の動きの状態なのか、両者の意味上のちがいは小さくない。

しかし、すべての説に共通する要素があることに注目すべきである。ベルグテイは、量の多い少ないはともかく、タルバガンを積んでいるために、馬には乗らず（乗れず）、ひいて帰ってきたという点である。「ぶらんぶらんとさせ」の訳を採るとしても、人が騎乗できない状態なのだから、馬の背にあったタルバガンは少なくはない。

1人で、それほどの獲物が期待できる狩猟、タルバガン狩りとはそうした狩猟であったということになる。

『秘史』の描く時代、タルバガンはどのように狩猟されていたのか。この稀有の史料は、そのことを窺わせる記述も、別の箇所に残している。

モンゴル高原を制覇したチンギス=ハーンは、宿敵メルキト部の残党を掃討すべく、驍将スベエテイ=バートルに下命する。『秘史』のその部分は、この史料特有の韻文で述べられている（第199節・巻8）。

やつらはあわてふためいて、まるで馬捕り竿にかかってしまったクラン（野馬）、矢傷を負った鹿のように逃げ去りおったぞ。

やつらが、翼あるものとして飛んで逃げたなら、スベエテイおまえは、海青の鷹となって捕らえよ。

タルバガンとなって爪で搔いて地中に逃げこんだなら、罅となって掘りかえし、捜しあて



図3 獲物を持つタルバガン=ハンターと馬に積まれたタルバガン。ハンターは、イヌの頭に似せたかぶりものをつけ、腰にハタキのようなタルバガンの注意をひきつける道具を帯びる (Mongolia. 4, 1998 より引用)。

よ。

魚となってテンギスの大海に逃げたなら、スペエテイおまえは、網となってすくいとってしまえ。

この命令は、世界各地の説話文学にしばしば現れる、変身追跡モチーフをふまえて出されているのであるが、ここには地面を掘りかえすタルバガンの猟法があげられている。

これは恐らく、先に挙げたベルグテイのタルバガン狩りとは違う方法である。タルバガンを掘りだす猟法はあまりに効率が悪い。これでは到底、1日で馬にたくさん積んで帰るといふ成果はあげられない。地下の、タルバガンがいそうなところの見当をつけて掘りかえすのは、おそろしく手間のかかる方法である。しかしこの場合の表現は、だからこそ、どんな手間がかかっても、必ず見つけだしてしとめよという、チン

ギス＝ハーンの強い憤怒と執着心が読む者に伝わってくる、ここはそのような仕掛けの行文なのである。

この例からもわかるように、タルバガンが巣穴にいるとき、さらには飽食して地下の巣窟で冬眠している時期に掘りだしてとる方法もある。

タルバガンの猟期は、春の5、6月、そして秋の8月から10月頃の2期に大別される。それ以外に、冬眠中を狙う方法もあるというわけである。先に挙げた漢文史料のなかにも「掘りとる」という表現で記録され、この狩猟法が古来よく知られていたことを示す。しかし、タルバガンの巣穴は入り組んでいて深く、的確に「寝室」に行きあたるかどうかは予測しがたいので、大きな労力を空費してしまうことにもなる狩猟法である（ルカーシキン 1937: 54-55）。

たくさんのタルバガンを、その日のうちに捕まえて帰れた先述のベルグテイは、恐らくは罾を使った猟法を用いていたのではないだろうか。罾によるタルバガン猟は、ひろくおこなわれており、それにはいくつかの方法があるようだ。

IV-2 罾猟で捕らえる

タルバガンが地下に住む習性を利用して、地上に出るのにどうしても通らなければならぬ出入りに仕掛け罾を設けるやりかたがある。罾は、現代においては針金や電線コードなどが用いられるように、だいたいが滑りやすい縄を輪にしたものである。

タルバガンが実際に入出入りする穴をよく覚えておき、そこに罾をしかける。その穴と、地下の通路によってつながっていると思われる他の穴は土や石であらかじめ塞いでおき、罾の縄の一端は短い木の杭を打ち込んで固定しておく。罾のある道を通らざるをえないタルバガンは、比較的容易に罾にかかってしまうというわけだ。

体の自由を奪われた動物は、なんとか穴のなかに逃げこもうとするが、縄の長さ以上の自由はきかない。その場に待ちかまえていた、あるいは罾の点検にやってきた猟師は、先に鉤のついた長い棒でなんなくタルバガンを引きずりだし、まだ生きているようなら撲殺するのである（張 1986: 124; ルカーシキン 1937: 51-53）。

1968年、中国の著名な作家で歴史学者でもある張承志は、東ウジュムチン地方に赴き、そこで4年間暮らした。文化大革命中の中国において、国家的規模で進められた「山に上り、郷に下」る運動に加わったのである。張が入ったその地域は、奇しくも、先に挙げた鳥居龍蔵がタルバガンをたくさん目撃したあの一帯であるが、この張承志も、半世紀以上あとのタルバガン猟について書きのこしている。要約してみよう。

秋のオトル（長く厳しい冬に備えて、家畜を山の麓の牧草の豊富な場所につれて行き、食いだめをさせること）の時期、その地の牧民は、この牧畜の大切な仕事の合間に「プロの狩人と見まごうほどに変身する」。「タバラガ」猟をするのである。タバラガとは、このあたりでタルバガンを指す方言である。

「ガホー」(yoq-a であろう (内蒙大蒙語研 1976: 768)) と呼ばれる鉄の罾があり、それを各自10個ほど持って、巢穴のそばにしかける。毎日朝夕、しかけた罾を確認し、また改めてセットする。罾のはさみの部分には、鉄の長い釘がついていて、地面に固定してあるので、罾にかかったタルバガンは逃げられない。

近辺に名の知れたタルバガン猟の名人は、毎日夕方になると20匹近いタルバガンをぶら下げて帰ってくるという。あまり熱意を持っていない人でも日に3匹は捕れるし、張自身も日に2匹を捕らえたことがある。成長したタルバガンの皮は、1枚3、4円で売れるので、毎日10匹捕ったとすると、その日の収入だけで、都市の熟練工の半月分の収入になる。(張 1986: 124-126)

罾猟によるタルバガン捕りが、効率のよいものであることがよくわかる。タルバガン猟ブーム最盛期ごろの際の報告によれば、1人の猟師が100から200の罾をしかけ、1日平均5匹から7匹、多ければ15匹もの猟果を得ていたという。

さて、罾の構造によっては、たとえ罾にかかっても、そのタルバガンが自分の穴に、罾もろとも、なかば逃げこむ場合もある。こんな状態になったタルバガンを引きずりだすのは大変だったようだ。前述のアンドリュースは、後肢に罾を食いこませたまま、トンネルの曲がり角のところまで逃げこんだ大きい牡タルバガンを、モンゴル人と2人がかりで、ありったけの力を発揮して引っぱりだそうとした。だが、その獣は曲がり角で体をねじくらせていて、1cmといえども動かせなかったと、しぶといタルバガンに手を焼いた印象を語っている。余儀なく彼は掘りだしたという (アンドリュース 1941: 125)。タルバガンは、切羽つまった状況になると、「そんな小さな動物としては、驚くべき力」を持っているのがよくわかる。

このようなタルバガンの様子を言いあらわした伝承をポターニンが伝えている。

タルバガンをその場で弓で射殺せばよいが、もしそれが矢を突き立てたまま穴に這いもどれば悪い。それはチトクル (悪魔) に変身するのである。そんなことになったら、10人がかり、いや全旗でかかっても、そいつを掘りだせない。(ポターニン 1945: 333)

1897年、張家口から庫倫に旅行したペフツォフは、イヌを用いたタルバガン猟を目

撃している。真新しい足跡のついているタルバガンの穴を見つけ、イヌとともにそのかたわらに身をひそめる。タルバガンが穴から出てくると、数歩穴から離れたときにイヌを放って捕らえさせるというやりかたである（ペフツォフ 1942: 94）。

ラルソンも、同様の狩猟法を目撃している。穴のそばで待ち伏せしていたイヌは、タルバガンの退路をふさぐ位置に飛びだし、イヌとの闘いに入るべく後肢で立ちあがった獲物の首筋に噛みつき一噛みで殺してしまう。モンゴルの猟師とイヌは、タルバガンを公平に分配し、肉はイヌが、毛皮は猟師が取る。よく訓練されたイヌは、毎日多数のタルバガンを捕るといふ（ラルソン 1939: 217）。

前述のとおり、1890年代にウリヤスタイ・庫倫間において福島安正は、タルバガンを巧妙に捕らえて、むさぼり食らうイヌの活躍の様子を記録している。

フルンボイルの東ウジュムチンにおける鳥居龍蔵の実見談によれば、用心深いタルバガンではあるが、恐慌状態に陥って不運にも自らの巣穴の位置を見失ってしまうと、馬に乗った牧民に追い回されたあげく、疲労困憊して捕らえられることもあるようだ。地上に取り残され、巣穴へはいる機会を失ったタルバガンは、イヌなどの恰好の獲物となってしまう。鳥居はその時の紀行文において「蒙古犬はその肉を食ふを以て頻りに之を追ひ廻すの風あり。即ち余等の通行せる時にも、一疋の犬の盛んにタルバガを追ひ廻すを見たり。タルバガは其の穴を見失ひ、犬に追はれつゝ逃げ走りしが、遂に追ひ詰められ進退谷まり、却て牙を出して犬に抵抗せり」（鳥居 1975: 168）と実見したタルバガンの生態を紹介している。巣穴あってこそ、巣穴のそばにいてこそそのタルバガンとでもいうことができようか。この場面はよほど印象的であつたらしく、同行の夫人きみ子も紀行文に書きとどめていることは先に述べた。

Ⅳ-3 タルバガンの銃猟

銃があれば、タルバガンを射殺する猟法をおこなう。銃身の先の方には、ふたまたに広がるようになっている支柱（ロシア人猟師は、*сошка* と呼ぶ）がつけられ、射撃時の安定性を保つ工夫がされていることが多い。

できるだけ巣穴に近づいて、大体タルバガンの出入り口から40～50歩程度の距離で銃を構え、伏せや膝撃ちの姿勢で辛抱強くひたすら待つ。こうしたありさまを見ていたアメリカの有名な探検家アンドリュースは、その待機の粘り強さを、時間など問題にしない「東洋的忍耐」と評している（アンドリュース 1941: 127）。巣穴に近くといっても、あまり近すぎると獲物に気づかれるから、そこそこの距離は保たなければならない。そして、タルバガンが十分に姿を現したところで発射するのである。

巢穴へ逃げこませないということと、毛皮を取るという大切な目的があるので、胴体部分を傷つけるのを避けて頭部に狙いを定めることが要求される。

昔も今も、外来のタルバガン猟目撃者の多くが、用いられる銃がひどく旧式なこと、それにもかかわらず狙撃の腕前が実に確かなことに瞠目している。19世紀の最末期モンゴルを訪れたラムステッドは、射程距離が長くないあまり上等でない銃と評し（ラムステッド 1992: 75）、新しくは、約百年後の1987年モンゴル人民共和国を訪れ、タルバガン狩りをまのあたりにした開高健も「腐りかかったような古銃」といつている（開高 1989: 18）。しかし開高は、目の前で百発百中にタルバガンをしとめたハンターのきわめて優秀な眼と腕前に感嘆することになる。

この他にも、一発必中を実見した驚きが伝わってくるとでもいおうか、そうした叙述がこの地への旅行記のタルバガン猟にかかわる記事に散見される。

そのやりかたの奇抜さで、あまりにも有名なタルバガンの狩猟は、やはり銃を用いて、次のようにおこなわれる。警戒心が強いタルバガンであるが、他方、好奇心が旺盛であるという性質が備わっている。そこを巧みについた狩猟法である。アンドリュースの観察した例は次の通りである。

タルバガンの群棲地に来た狩人は、銃を抱いて四つん這いになり、肩の上に持参してきたイヌの皮をかぶって、のそのそ這いながら巢穴へと近寄っていく。時々止まっては吠え声をあげ、頭を振る動作をする。早くもこの奇妙な物体に気付いた見張りのタルバガンは、全身に警戒心をみなぎらせ、上へ下へと身を躍らせながら警報を発している。不思議なイヌのような物体は、じりじりと近づいてくる。タルバガンは決して巢穴の入り口から離れようとはせず、かといって、抗しがたい好奇心と興奮のゆえに、一気に穴のなかに逃げ込むこともせず、そわそわしながらもお凝視しつづける。と、その物体は、突然、押しつぶされたように沈み込んでしまうではないか。びっくりしたタルバガンは、ついに好奇心に圧倒され、事態の急変をよく見きわめようと、後肢で精一杯のび上がる。そこへ狙いすました猟師の銃が発射されるという次第である（アンドリュース 1941: 128）。

この猟法にはヴァリエーションもあるようだ。ラムステッドは、イヌの皮をかぶらない別の方法を伝えている。猟師は、棒切れか鞭の先に、紙やハダックなどの、なにかピラピラするものをつけて、それを風車のように振りまわしながらタルバガンの巢穴に近づく。物見のタルバガンは警報の鳴き声を発して穴に逃げこむ。猟師はその穴をよく覚えておき、枯れ葉を集めてきて穴の入り口のところで火をつけ、穴のなかへ煙を吹きこむ。首尾よく行けば、しばらくすると煙に燻じられたタルバガンがふら

ふらになって穴の外へ出てくる。すかさず鞭か棒で撲殺するというものである（ラムステッド 1992: 76）。

前記した開高健が見たタルバガン狩りでは、白い服を着たハンターが、白い布きれを結びつけたハタキのようなものを振りながら、地べたを這って巣穴数 m のところまで近づいて、耳のあたりを銃撃するというプロセスをとる。

IV-4 燻し出し猟

タルバガンの巣穴を燻して捕らえるというのもよく知られた狩猟法である。18世紀初頭のモンゴル法典（「三ホジョン法典」）にも、「タルバガンを燻しだして、掘りおこししなければ捕りもしないで、そのまま放置しておく者があれば、かかる者から三歳仔の牡牛一頭を取上げる」などという条文があることからそれは明らかである（田山 1967: 270）。

法によって規制されるほど広く行われていた猟法であることが窺える。しかし、火を用いるこの狩猟は、牧民にとって極めて重要な牧草地が、ほんのちょっとした不注意によって大量に失われかねないという危険性を含んでいた。好個の例がある。

1996年春まだ浅いころ、モンゴル国に発生した空前の大規模火災は、国際的に大きな衝撃をもたらした。結果として、主にモンゴル国東部地方の、草原や森林1000万ヘクタール以上を焼く大きな被害をあとに残したからである。この大火災は国際的な関心を引いたようで、さまざまな支援がおこなわれたことも記憶に新しい。最初の火災は、2月23日ドルノド県で発生した。一旦鎮火したかにみえても再び出火という状況が繰り返されたのは、1995年から96年にかけての冬が暖冬で降雪が少なく、地表が乾燥しきっていたことによる。

モンゴルの新聞『アルディン=エルフ』（「人民の権利」の意）が、1996年5月30日付の紙上で報じたところによれば、数ヶ月に及んだこの大規模火災には、170ヶ所の火元と380件あまりの火災が確認されているが、なんと、1件を除くほとんどすべてが、暖をとるためのたき火や煙草の不始末などの人災であったという。

そうした人災の1つで注目に値するものとして、タルバガン猟のため巣穴近くで火を焚き、それが燃えひろがったというケースがある。4月16日スフ=バートル県で14歳の少年が、またヘンテイ県バヤン=オボ-ソムでは同18日に、やはり14歳の少年が集めてきた草をタルバガンの穴の近くで燃やして失火したというのである。これらのニュースは、タルバガン燻しの際の過失が、いくつもある失火の原因のなかに含まれており、その猟法自体が今もなお行われつづけていることを明白に示すものとい

えよう。

同じく火を使う、しかしもっと過激な狩猟法も伝えられている。生けどりにした1匹のタルバガンの尾に爆竹をつけ、巣穴のそばに放す。自由になったタルバガンは、あわててふためて巣穴に逃げこむが、穴のなかで尾につけられた爆竹が爆発することになる。その巣穴にいたタルバガンたちは、大パニックに陥って我がちに穴の外に逃れ出てくるが、出入り口に仕つらえられていた網によって文字通り一網打尽に絡めとられてしまうのである（飯島 1921: 671）。

類似の、ややおだやかな猟法について、1923年に北モンゴルを通過した有名な探検家ヘディンが伝えている。当時外国人による銃猟はすでに禁止されていたので、漢族の猟師たちが新たに考えだした猟法であるとヘディンはいう。捕らえたタルバガンの首に鈴をつけ、さかさまに吊して、巣穴の出入り口に放つ。がむしゃらに穴の奥へ突き進んで行くタルバガンの首の鈴が盛んに音をたてると、恐慌をきたしたタルバガンたちが先を争って地上へ出てくる。それを棍棒で撲殺するというもの。ゾロゾロ出てくるタルバガンのうちから1匹をまた捕らえ、同じように鈴をつけて、また他の穴に投げこむという具合である。タルバガンを1匹でも多く捕らえようという、猟師たちの発想の豊かさにはまったく驚くべきものがある（ヘディン 1939: 132-133）。

人民共和国時代のモンゴルにあっては、タルバガンの巣を破壊したり、煙で燻したり、さらには巣穴に水を流しこんだりして捕らえることが禁止されていたことがある。ある場所において、種を根こそぎ断ってしまうことをおそれての規制である（Намнандорж 1964: 121）。

V タルバガン大濫獲

V-1 タルバガンの毛皮獣としての価値

タルバガンと人間とのかかわりのなかで、最も重要なテーマは、この動物の経済的価値である。タルバガンの大濫獲——地域によっては絶滅さえ懸念されるような——という現象を招くことになる、毛皮原料としてのタルバガンのありようについてである。

タルバガンが最も熱い注目を集めたのは、あらためていうまでもなく、毛皮獣としてであった。

従来もタルバガンが棲む地域では、その毛皮が重宝な防寒衣料として用いられては

いた。しかしここで述べるのは、そのような地域限定的な需要ではなく、国際的な規模でのブームについてである。劇的な需要増をもたらした背景、そしてそれが、タルバガンの棲息地に一体どのような事態を引きおこしたのかを見てみよう。

1900年代最初の10年間のはじめ、ヨーロッパ市場で、タルバガンが有望な毛皮資源としての商品価値を認められたのが、そもそものきっかけであった。高級毛皮のイミテーションとなしうることを、また新開発の染色法がほどこしやすいということが評価されたのであった。テン、ミンク、カワウソなどの高級毛皮のイミテーションにすることができるというわけである (Benedict 1996: 156)。19世紀末頃から、ロシア市場における大需要が始まっていたが、世紀が変わってすぐに、さらに新たな大型需要が加わったのである。

今日においても、その毛皮は、重要視されている。毛皮は、奢侈品としての価値もさることながら、寒冷地においては必需品であることを忘れてはならない。

そうした観点から見ると、人間にとって望ましい常用の毛皮というのは、1頭(匹)あたりの(毛皮の)面積がなるべく大きいこと、同種のものが大量に、かつ効率的に確保できることであったろう。こうした条件にかなう動物として、中央ユーラシアではいかなる動物が想定されたのであろうか。ヒツジ、ヤギなどの家畜と肩をならべて、野生種としては「元皮」と呼ばれたイタチ、そしてとりわけタルバガンがこうした条件に、まさにぴったりの動物と見なされたのであった。

齧歯類の動物は、一般的にいえば、繁殖力は「鼠算」というよく知られた表現もあるほどであるし、環境への適応性も類例を見ないほど高い。哺乳類全種の4割近くを齧歯類が占めていることからそれはいかばかりか。

だが、沢山いる齧歯類ではあるが、毛皮獣として用いるためには、ある程度大きい体軀を備えている必要がある。同じ苦勞をして捕らえるなら、大きい個体のほうが、当然実入りは多くなる。いくら個体数が多いといっても、普通の「小さな」鼠では使えないものにはならないのである。

先に見たように、中央ユーラシアには、タルバガンの他にも多くの齧歯動物が棲息する。トビネズミ、ハタリスなどはよく知られている。けれども毛皮獣としてタルバガンと比べてみるならば、ハタリスは比較的、トビネズミはずっと体型が小さい。そうなると、残ってくるのは、最大級の体軀をもつタルバガンということになる。

ここで指摘しておかなければならないのは、タルバガンの猟獲に恵まれない地では、たとえばハタリスなどの比較的小型のものも毛皮獣として狩猟されていることである。だが、「満蒙」地域において、それはあくまでも次善の獲物であるにとどまる。

1928年、「満蒙」地域で執拗に発生するペスト流行への対策の重要な課題として、南モンゴルの鄭家屯一帯で齧齒類の棲息状況調査をおこなっていた満鉄衛生研究所の倉内喜久雄は、1人の漢人がハタリス10数頭を捕獲しているのを目撃する。ハタリスは、農作物に被害を与えることから農民に忌避されており、捕獲がその動物の駆除につながることはもちろんであったが、くだんの農民の話によれば、肉は食用に供し、毛皮は売却するというのであった。その話を聞いた倉内は、最寄りの都会である通遼の毛皮屋の店頭で売られている品目を調査したが、そこで多くのハタリス毛皮を確認した。防寒用、耳覆いなどに使われていたようであるという（倉内 1930: 686-689）。

タルバガンは、他のリス科の動物のいくつかがそうであるように群棲する。たしかにその住処は、山地性草原地帯であり、人里遠く離れているのが常である。

しかし、巢穴のまわりに掘り出した土を堆積する習性ゆえに、だいたいのあたりをつけておけば、たやすく棲息地を特定できる。人跡まれな場所ではあるが、そこへ行きさえすれば、必ず集団で棲んでいる目じるしを見いださうというのは、ハンターにとって魅力的な条件となりうる。本来狩猟は、獲物に行きあたることができるかどうかということ自体が、最初の難問としてハンターを悩ませるのであるから。

タルバガンの場合のように、あらかじめポイントが確定しうる狩猟は、準備をきちんと整えさえすれば、高い効率を得られることになる。

こうして、中央ユーラシアの特定の部分においてのみ知られていた毛皮資源としてのタルバガンは、世界的毛皮市場の脚光を浴びることとなった。

日本の皮革業界においても、それはタルバガンの俗訛である「トラバカン」という名称のもと、「茶染めをして」、肩掛、外套の襟などに用いられていた（武本 1969）。

タルバガンは毛皮獣として大いに珍重されていた。より正確に言えば、現代でも珍重されている。保温性が良く、毛の密度が濃いことから珍重されており、たとえば中国の内蒙古自治区においては、皮製帽子、皮製襟、革手袋、オーバーコートなどの製造に用いられている。モンゴル国においても、たとえば（人民共和国時代の）1964年8月2日付の新聞『ウネン』（「真理」の意）は、ドルジゴドブ商業調達相の「タルバガン皮は貴重な富である」という文を掲載している。紹介してみよう。

モンゴルでは、この20年あまり、毎年約100万頭のタルバガンの毛皮と多量の油を輸出し、国家・人民に必要な物資を購入している。1年間のタルバガン毛皮だけで、その見返りとして、1000万 m の木綿、あるいは約550台のソ連製高級乗用車ジルを購入できる。

1964年にも、100万頭あまりのタルバガンを捕獲し、その毛皮と油脂200トンを採取する

予定だ。

モンゴル国地域におけるタルバガン産地は、アルタイもの、東部もの、西部ものに大別される。モンゴル地域のアルタイ山脈西北部に産するアルタイものは、体型も大きく、黒い背中の中毛、毛氈のように濃くて柔らかい毛並みを持っており、他地域産出のものを圧して珍重されている。

この担当大臣の言葉のごとく、現代においても熱い視線を集めているタルバガン毛皮については、大別して春ものと秋ものとがあり、春ものを「黄獺子皮」、秋ものを「青獺子皮」と呼ぶこともある。

両者のうち、市場価値では圧倒的に秋ものが優位に立つ。秋ものの毛皮は、脱毛期を終えて、温かい冬毛を生ずるからである。ふさふさして見た目も美しいだけでなく、丈夫でもあるという。その時期の柔毛（下毛）は暗色を呈しており、毛軸は明るく淡い茶色で、毛端は暗褐色である。これに比べると、春もの、つまり暖かい時期の毛皮は評価が低い。5月頃の皮は脱毛がさかんな時期で、毛が固着せず簡単に抜けおちてしまし、夏季のそれはさらに粗であり、それよりもなによりも、暖かさを確保する大切な下毛がないのが決定的なマイナス要素となるので商品価値は著しく低い。

ルカーシキンがまとめたザバイカルにおける1913年から34年までの価格統計資料（ルカーシキン 1937: 60）をもとに、両者の較差を比較してみると、秋もの100に対する春ものの価格較差は、最大51.9%（1920年）、最低95.8%（1913年）、平均70.2%と、大きな開きが見られる。

V-2 タルバガン「受難」

タルバガン棲息地周辺の街では、突然の需要激増のため、異様な状況が生じた。ロシア人が、漢人が、そしてもちろんモンゴル人も、この小動物めざして殺到したのである。天災・飢饉・戦火などに追われるようにして、中国から「満蒙」地域に流れこんできた食いつめた漢人たちは、厳しい自然環境のもとで苦しい農業生活を細々と営んだり、「苦力」（クーリー）の名で知られている肉体労働に従事していた。ロシア人にしても事情は似たりよったりで、そうした人たちの多くは、この情勢を見てタルバガン捕りに転向する。

狩猟によって得られる収入は、貧窮の境にいたこうした人たちの生計に明るい展望をもたらすかに見えた。先に見た張承志の見聞でも明らかなように、タルバガン狩りは簡単な猟具ででき、熟練の専門猟師でなくても、ある程度の猟果を挙げうる技術的

な容易さがあったことも、いっそう事態に拍車をかけることになる。なにしろ、「大人ばかりでなく、子供さへも従事する」手軽さなのだから。

現地の人たちのみならず、春秋の農閑期には、遠く山東省や、満洲南部あたりからも、農民たちがタルバガンめざしてどっと押しよせた。

男女を問わず、子供まで、まさに猫も杓子もタルバガン猟へとむかうという風景は、ハイラルだけのものではなかった。著名なタルバガン棲息地域に近い満洲里やジャライノールなどではもっと極端な光景が見られた。これらの地方では、微々たる給与しか支給されない軍隊から、ずっとおいしい儲け口であるタルバガン狩りに転向するため、脱走者が続出、その数150名にもものぼったという噂まで飛びかった。兵士や巡警など、社会秩序を維持すべき者までが浮き足立っているのである。特に猟期には、その日暮らしの、社会の最下層にあえぐ「苦力」などはいうに及ばず、職工、食堂、旅館などのボーイやコック、各家庭の下働きなど、定職を持つ者までもが、一時に姿を消してしまうような有様となったのである。ハラノール炭鉱は休業、ジャライノールの炭鉱では操業休止寸前にまで追い込まれるほどであった。まさにゴールドラッシュを思わせる狂躁である。街には働いている人の姿を見かけることも少なくなり、さびれた雰囲気を感じられはじめた（志水 1925: 59）。

多くの職場で働き手が姿を消してしまったため、新たな労働力を求めるのがすこぶる困難となった。それゆえ、給料相場が暴騰するような事態に至ったのだった。

この、いわばタルバガン狩猟全盛期においては、一体どのような規制が設けられていたのであろうか。

タルバガン狩猟に関しては、狩猟者が個人あるいは組合（こうした組合組織をロシア人たちは、アルテル артель——ロシア語で組合の意——と呼んでいた）の名であらかじめ出猟予定地域を決め、地方官憲に出願して猟師各人の税を納付して鑑札を交付してもらわなければならない。許可を得た狩猟者は、その経営規模に応じて20～30名から200～300名の猟師を雇い入れ、10名程度を1組として各猟場に配置して捕獲させる。1人で1日に13匹も捕らえることがあるという。捕らえたタルバガンはただちに撲殺し、その場で皮を剥ぐ。猟期中の食事、現場での生皮の処理、乾燥時の見張りなどの任にあたる者を雇うのが通例である。その毛皮は、一定の場所に設けたベースキャンプ的な役割をする本拠に集めてよく乾燥し、布袋に詰めて付近の市場に搬出するという段取りである（ルカーズキン 1937: 64-67）。そして、たとえば満洲里では、第一次世界大戦（1914-1918年）以前、タルバガン皮は、すべてドイツ向けに出荷されていたが、1梱500枚とし、ところどころに防腐剤としてナフタリンを散布して圧

縮、外側を麻袋包みにして鉄帯で胴締めをするという形で発送していた（原・中山 1919: 604）。

だが一方で、当然予想できることだが、このような規制をくぐりぬける、おびたしい数の、個人あるいは集団の「もぐり」の狩猟者もいたのである。統計には把握しえないこの種「猟師」たちが、さまざまな問題をひきおこすのである。

1934年、先述した鳥居龍蔵もとりあげていたタルバガンの有名な棲息地ウジュムチン地方へとハイラルから狩猟に向かったロシア人、日本人、漢人は1000人にも達したという。ハイラルからハンダガヤへ5、6日、そこからハロンアルジャンまで2日、そして目的地のウジュムチンまでは大体10日行程である。6、7月頃に出かけ、9、10月頃にもどるまで草原にいつづけてタルバガン狩りをするのである。

フマラボルンチュエフスキーは、1910年、ハイラルでは5000人、満洲里では11000人にもおよぶ人数がタルバガン猟のために通過したという（また同年満洲里には50もの商会の出先機関があった）（ルカーシキン 1937: 87; スクニョフ 1935: 164）。また、エフチャーヒエフによれば、ザバイカル地方においては、1925年8000人をくだらない人たちがこの動物の猟にかかわった（スクニョフ 1935: 163）。驚くべき数字である。

ともあれ、こうした「にわかタルバガン＝ハンター」たちのなかには、それまでは日々の暮らしを維持するのがようやくというありさまだったのに、故郷へ幾ばくか送金するという余裕を得る者さえ現れるのだから、このブームはまんざら実体のない現象でもなかったのである。

罾やその他の猟具、狩猟中の日用品など、つねひごろからモンゴル人に必要な品を供給していたロシア人や漢人の商人たちは、猟具の販売で大もうけした。ただし、その地で求めうる唯一の罾であるロシア人のもたらす製品の評判はよくない。ロシア製の二重パネの罾はパネが弱くてほとんど役に立たないので、しばしば罾猟で失敗するというのである（アンドリュウス 1941: 126）。

1923年11月18日、きびしい寒気のなか、張庫街道をクローンに向かっていたヘディンは、中国方面へ向かういくつかの漢人の隊商に出会っている。隊商の帰途の時期としてはずいぶん遅いが、ヘディンは、その隊商が「幾千匹というモルモット」毛皮をラクダに積んでいたという。これは買売家が荒稼ぎの獲物を持ち帰る、まさにその場面である（ヘディン 1939: 82,133）。

V-3 驚異的な産出量

タルバガンは、20世紀の最初期に、毛皮獣としての価値を新たに見なおされて以来、

濫獲の対象となってしまった。果たしてどのくらいのタルバガンが捕らえられたのであろうか。今日まで残されている統計資料から、その実態をさぐってみよう。

言うまでもなく、統計資料は、定点で、統一された集計法によって、長期間にわたって行われたものに依拠すべきである。そうでないものについては、はじめから限界性が存在することを、よく認識した上で慎重に数字を検討すべきである。

ここにあげられる統計資料は、このような原則からすると、程度の差こそあれ、それぞれ問題点を含むものである。各統計資料は、異なる立場から集計された数字であり、統計の及ぶ期間も長いもので十数年程度である。それでも、おおまかな数量、だいたいの傾向、時代の推移などについての「あたり」をつけるくらいの、統計資料の量と質は備わっているものと思われる。また、満洲国時期の税関従事者の指摘によると、一般的に言って、世界のどこでも、毛皮業者は、非常に排他的であり、その技術、取引、価格などについては、厳重な秘密主義を保っているもので、実情を知るの容易ではない(手島 1938: 35)。

こうしたさまざまな限界性があることをよくよく認識しつつ、いくつかの統計図表を概観してみよう。本論でとりあげているタルバガンの大産出地は、国別によると、ロシア(ソ連)のザバイカル地域、モンゴル(人民共和)国、そして中国(「満洲国」)のフルンボイル地域の3地域に分けられるだろうが、これはもちろん一続きの空間的広がりである。ただ、統計資料は、それぞれの地域において、別途独立してまとめられるのが常であるので、以下の統計表も、モンゴル地域、フルンボイル地域、そしてザバイカルの順に別々に示した。

表1・表2「モンゴル人民共和国のタルバガン捕獲量Ⅰ・Ⅱ」は、Ⅰはナムナンドルジの著書、Ⅱは人民共和国中央統計局の発表になる数字をまとめたものである。19世紀の末にすでに142万匹(表1)を数えているのは、ロシア市場での需要がこの時期にはすでに始まっていたことを示している。1906~1910年までの産量は驚くべきもので、5年連続で200万匹を上回っており、この期間だけでモンゴルでは1284万匹のタルバガンが捕殺されたことになる。また、1910年のごときは実に320万匹に達する。統計の示すかぎりにおいては、1914年・1915年の両年を除いて100万頭を下ることがない。表2では、1950年の突出した産出量が注目に値するが、その原因は定かでない。最も印象深いのはこのような濫獲にもかかわらず、現在に至るまで、大体において毎年100万匹程度の産出量が見込めるという点で、タルバガンの繁殖力がいかに旺盛であるかがはっきりとわかる。ルカーシキンによれば、ニキフォロフの報告では1927年までのモンゴルにおけるタルバガン生皮の年平均産出量は180万枚(庫倫経由のみ)

だと述べている（ルカーツキン 1937: 59）。そして同時に、濫獲以前のタルバガンの棲息状況に思いを致すとき、前述マイスキーの「全蒙古の山野は」「タルバガンの巢となって穴にて覆われ、乗馬の通行は困難」という記述、あるいは鳥居龍蔵の東ウジュムチンにおける、タルバガンが「無数にいる」という報告が誇張でないことも十分に想像がつく。

表3は、フルンボイル地域のタルバガン捕獲量である。1910年の肺ペスト大流行のあと、防疫対策として設置された消毒所を經由した生皮についての統計である。ただし、この消毒所の評判は必ずしも高くなく、「支那官憲では満洲里と海拉爾に消毒所を経営して居るが私としては十分とは考えられない」し、この「消毒所を標準とすればペスト菌の付着したタルバガン毛皮が輸出」されるのではないかという専門家の懸念も表明されている（岩田 1927: 28）。こうした機関での手続きを忌避する狩猟者が

多くいたことは想像に難しくなく、その点をふくんでこの統計表を見る必要があるだろう。フルンボイルにお

表1 モンゴル人民共和国のタルバガン捕獲量I

年	枚数
1892	1,420,000
	}
1905	1,000,000
1906	2,040,000
1907	2,984,000
1908	2,472,000
1909	2,130,000
1910	3,220,000
	}
1913	1,100,000
1914	680,000
1915	900,000
	}
1922	1,000,000
1923	1,300,000
1924	1,400,000
1925	1,401,000
1926	1,843,400
1927	2,553,400
1928	1,820,100
1929	2,257,600
1930	1,598,000
1931	782,000

(Намнандорж 1964 より引用作製)

表2 モンゴル人民共和国のタルバガン捕獲量II

年	枚数
1940	968,100
	}
1945	1,406,300
	}
1950	2,337,500
	}
1955	1,922,700
	}
1960*	1,034,200
1961*	1,155,900
1962*	868,400
	}
1965	1,208,800
	}
1970	1,201,000
1971	1,141,900
1972	845,400
1973	969,700

(ЦСУ 1971 より引用作製。*は Намнандорж 1964 で補う)

いても、100万匹をこえるタルバガンが捕殺された年度があることがわかる。

表4は、ザバイカル地域の統計であるが、1930年代には8万枚をこえることはない状況となっていた。

すべての統計資料から明瞭にうかがえるのは、もちろん産出量の厩大なことであるが、年度ごとの激しい変化も実に印象的である。実際タルバガン毛皮の相場の推移は劇的である。たとえばハルビン市場での秋物タルバガンの1927年の価格は、1915年の1042%、春物も1916年比で760%の高騰ぶりである (Lukashkin 1938: 82)。アンドリュースは、庫倫において、1920年5月に1枚30セントだったタルバガン毛皮が、同年10月はじめには1ドル25セントに高騰しているのを見て、「大都市の需要が何千マイルも離れた生産の中枢地へどれほど早く一直線に達するものか」を知って瞠目している (アンドリュース 1941: 127)。タルバガンの皮は、「満洲」地域のものは、日、英、米、および上海、天津などに輸出されていたが、その大部分は米国に送られていた。米国ではこれを色揚げして優良毛皮の模造品をつくっていた。ザバイカルやモンゴルなどの大量の産品は、ロシア経由でヨーロッパに輸出されていた。こうした周辺勢力圏をもふくむロシア産毛皮世界市場占有率は、取引高にして50%にも及んでいた。し

表3 フルンボイルのタルバガン捕獲量

年	枚数
1913	30,761
1914	177,460
	}
1921	2,013,663
1922	768,317
1923	228,783
1924	1,038,096
1925	276,740
1926	505,063
1927	292,429
1928	733,155
1929	278,306
1930	8,174
1931	15,000
1932	48,317
1933	80,000
1934	160,000

(東支鉄道統計集 (消毒所經由生皮) ルカーシキン 1937 より引用作製)

表4 ザバイカルのダウリヤ草原におけるタルバガン捕獲数

年	枚数
1908	700,000
1909	800,000
1910	2,500,000
1911	1,329,000
1912	1,332,000
1913	930,000
1914	824,000
	}
1923	20,000
1924	100,000
1925	268,000
1926	350,000
1927	62,000
1928	59,500
1929	85,000

(ルカーシキン 1937 より引用文献)

かし、あまりの濫獲と、ロシアの第1次世界大戦参加、ひきつづいて起こったロシア革命などの政情不安、そして米国の経済不況など、大消費国の国内事情によって、その輸出は激減することになる。1929年10月24日、ニューヨーク株式市場の大暴落に端を発する世界大恐慌の激甚な影響は、表3に明白である。ロシアでは、革命時には毛皮の供給が全く停止したこともあったほどで、ロシアからヨーロッパ向けの産出量が大幅に減っただけではなく、満洲から輸出されたタルバガンの毛皮についても1928年には82万枚を越していたが、1931年には僅かに7万枚となった（米内山 1938: 155）。概して、モンゴル地域では（乱高下の比較的少ない）安定した産出数を保っているが、ザバイカルやフルンボイルでは著しい消長が見られる。

VI 齧歯類と結びついたペスト

VI-1 ペスト流行のありよう

本論で検討してきたタルバガンの毛皮需給の消長は、人類にとっての最大の災厄のひとつペスト (*Yersinia Pestis*) によって、大きく変動した。

ペストは、もともとは野生の齧歯動物の間に現れる動物間流行病 (epizootic) である。宿主となる動物のあいだにおいて、定期的に激発するのである。このような場合、草地や平原では、しばしばペスト死した動物の死骸が累々と横たわるといふ情景が見られる。タルバガンが豊猟の時にペストが流行するという説には、一定の根拠がある（満鉄衛生課 1928: 149）。現に、モンゴルにおけるペストの呼び名は、タルバガン=タハル (tarbayan taqal, 直訳では、タルバガンの伝染病) である。注意すべきは、動物間流行の段階でのペストはヒトの場合のように致死率が高くないことである。実は、後にふれるように、このことこそが、ペストの永久的な病巣地域が中央ユーラシア地域の各処に存在する結果を生む。

野生の世界に住むタルバガン、ハタリス、あるいはプレーリードッグなどの保菌動物から、よりヒトの社会に近いノネズミ、クマネズミ、ドブネズミなどへ、——そしてウサギ、イヌ、イエネコなどへも——、あるいはヒトそのものに、ノミを通じてこの細菌が感染して、やがてそれがヒトのあいだに伝染する。それが、なんらかの経路によってヒトの世界に伝わり、流行病 (epidemic) となると、深刻な災厄をもたらすということになる。epidemic としてのペスト (ヒト=ペスト) が出現するのである。

ヒト=ペストの主要な病型は、腺ペストと肺ペストの二種である。

有菌ノミに刺された部分の近くの部位にあるリンパ節が腫れあがり、直径 3-8 cm にも達する。この出血性化膿性炎症は、たえがたい疼痛をもたらす。やがて細菌はリンパや血液の流れによって、全身を侵し、敗血症を起こし、患者を死に至らしめる。カミュは、この伝染病の名をタイトルとする傑作において、こうした患者の病状の推移を冷厳に描いているが、そこに描かれているのは腺ペストの症状である。

もう1つの代表的症例、肺ペストは、致死率がきわめて高い。この病型は、すでにペストに感染したヒトの喀痰中に菌が混在し、咳や会話中の飛沫を通じて、気道感染し、細菌が肺に入って出血性気管支肺炎を起こす。ヒトからヒトへと感染して行き、即座に肺ペストの新しい犠牲者が生じるということになるので、危険この上ない。

ヒトがペストに感染するまでに関与する哺乳動物は実に約230種、そしてノミは100種類を数えるという。驚くほど多岐の伝染経路を通ってくる可能性があるのだ。

ペストは、保菌動物が棲息する地域においては、ちょうど風土病のように存在しつづけている。中国北辺、モンゴル、中央アジアなどの地域では、かつてペストが流行し、保菌動物が残存しているので、なにかきっかけさえあれば、再び流行する恐れがあると考えられている。近時ペストが流行した地域はアジアだけではない。WHO (国連世界保健機関) ペスト専門委員会の第四次報告に付された世界のペスト病巣地図は、20世紀後半におけるこの厄介な疫病の広がりや、雄弁に物語っている (WHO 1970: 6)。

このようなペスト病巣地域が存在するのはなぜか。医学者の現在の通説にしたがえば、野生の齧歯類の社会における epizootic としてのペストは致命的ではない。ヒトにたとえれば、はしかや天然痘のごとき幼児期の病気のようなものであり、そこでは宿主の動物とペスト菌とのあいだに、安定した適応パターンが確立しているという。

宿主の動物は、抵抗性か感受性か、あるいはその双方をもっており、そのことによりペストの病巣は維持され、確実に次代に継承される。動物間流行の段階で生き残る動物が少なからずいることが、ある地域に病巣が維持されるという現象を招いているのである (グレッグ 1980: 80-95)。動物間流行においてその齧歯動物が全滅すれば、その地域のペストはきれいさっぱり一掃されるはずである。かくして、病巣があると見なされている地域では、ペスト流行の危険性は永久に去らないことになる。永久的な病巣地帯が存在するのは、こうした事情による。

VI-2 3度のパンデミック

ペストの真の恐ろしさは、パンデミック (pandemic) として立ち現れるときにき

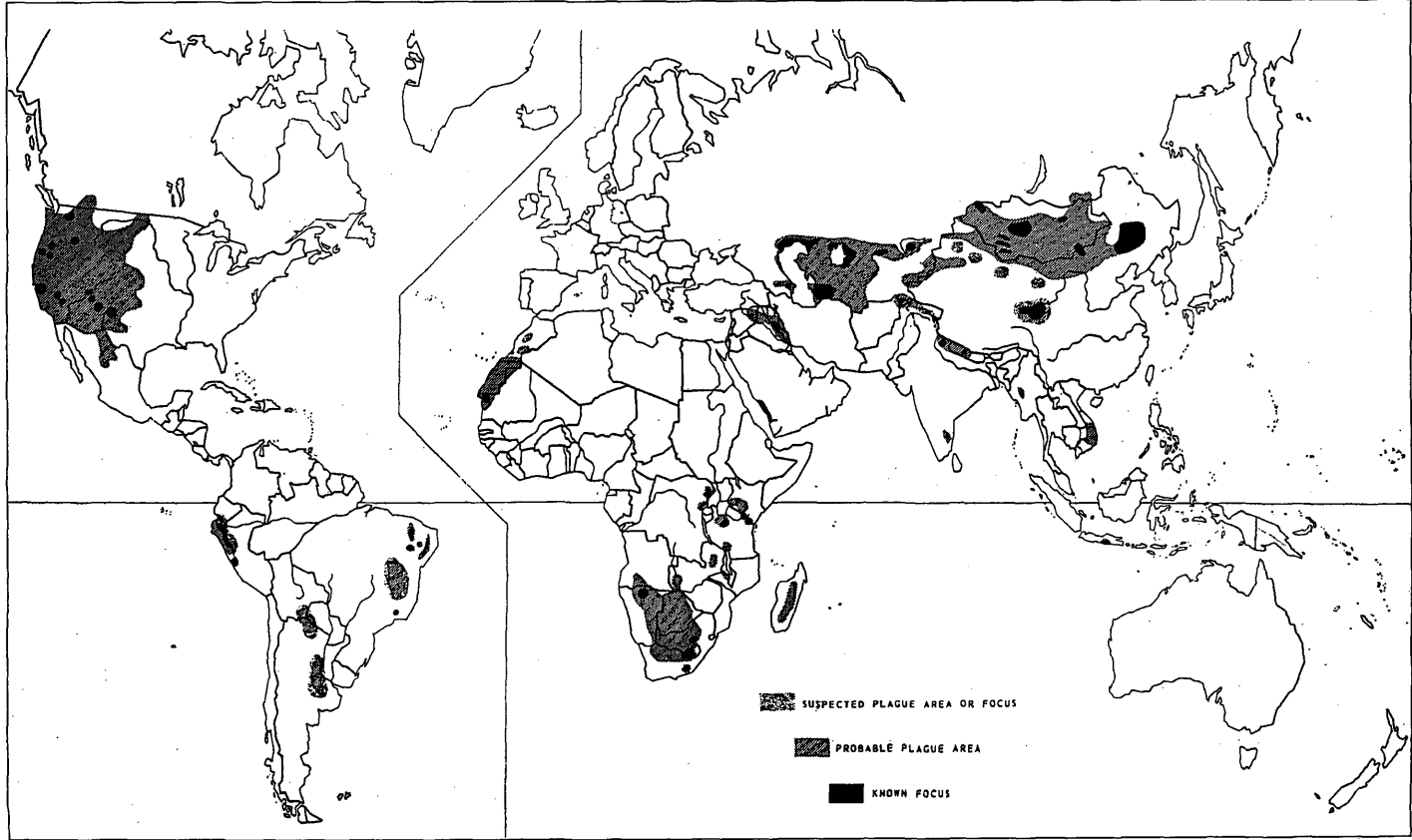


図4 1969年世界のペスト病巣地図。上より，疑わしい地域，確かな地域，既知の病巣地。(WHO 1970) より引用。

わだつ。パンデミックとは、ときに大陸をこえる規模となる地域的な拡がりを見せるだけでなく、数世紀にもわたって存続しつづけることさえある世界的大流行を意味する。

多くの医学者は、疫学的研究業績にもとづいて、世界史上3回のパンデミックが存在したという。その3つのパンデミックを概観して見よう（春日 1986などによる）。

まず、540年すぎから始まる、ペストと確認された最初の大流行。ペストは、エジプトからヨーロッパ内陸部へと拡がり、8世紀末になってようやく鎮まるまでのあいだに、東ローマ帝国住民の約半数を倒した。「ユスティニアヌスのペスト」とも称されるとおり、名君ユスティニアヌス帝（527-565年）の治下のことであった。この国が解体し、かわりあうようにアラブのイスラム勢力が進出してくる原因の一つは、その後、何度も猛威をふるったペストによるともいわれるほどである。古代オリエント世界の終焉にペストの流行がかかわっていたといわれる所以である。

第2次パンデミックは、14世紀中葉、全ヨーロッパ的規模の大流行として知られるものである。荒れ狂った今回の疫病の推定される犠牲者は2500万人。黒死病（Black Death）という呼称が生まれたのは、実にこのときのことであった。第1次のそれはアフリカからやってきたが、このたびの発源地は中央アジアに行きつく。

このときのヨーロッパにおける大流行の契機については、古来、モンゴルを元凶と名指しする次のような話が有名である。クリミア半島の港町カフファを包囲していたキプチャク=ハン国の軍隊にペストが突発した。モンゴル軍は攻城を断念、撤退する。モンゴルは、そのとき、腹いせにペストに倒れた犠牲者の死体を巨大な投石機で城壁ごしに街のなかへほうりこんだ。こうして疫病はほどなく、街の中にも広がった。そして、カフファからクリミア半島に拡散し、8万5千人の人が倒された。ペストは船で各地の港町に伝わり、やがてヨーロッパ各地に浸透するのは時間の問題となった。

第2次のパンデミックにより、イタリアやイギリスでは人口の半分が、ヨーロッパ全体では4分の1ないし3分の1の人口が抹殺された。この災厄によるヨーロッパにおける人口の激減は、労働力の絶対的不足を招き、封建制度の根幹に大きな打撃を与えた。かくして、時代は中世から近世へと変貌することになる。

先の例もそうであるが、ペストという疫病が歴史の流れを変えるなどよくいわれるのも、こういう観点から見るとうなずける。

当時の、パニックに陥ったヨーロッパの人たちの様子は、1348年のフィレンツェでのペスト流行を題材としてつくられたボッカチオ（1313-1375年）の傑作『デカメロン』、あるいはイギリス史で「ペストの年」といわれる1665年からの大流行、いわゆ

る「ロンドンの大疫」を描いたデフォー（1660-1731年）の『ペスト』（原題は *A Journal of the Plague Year* 『ペスト年代記』）によって、私たちの前に生々しく再現される。ヨーロッパ世界におけるペスト流行は、より小規模のものはその後もたびたび見られるが、いまものべたイギリスでの大流行を最後に、局地的な流行へと収束して行く。

第2次パンデミックは中国地域でも猛威をふるった。マクニールは、世界史上にあらわれたペストをはじめとする疫病の意義を、包括的に論じ、疾病と人間社会というテーマに関する研究を残した。最も鮮明な「病理中心主義」論者（見市 1989: 4）として、賛否双方の論点から盛んに引用されるマクニールの所説は、ペスト研究にかかわる医学的学問分野からも一定の評価を受けているように見える。歴史学の分野においても、たとえばモンゴル通史において新鮮な切り口を提示してみせた D. モーガンは、マクニール説を「魅力的な著書」にある「推論であるが、たしかにもっともらしい」説と評して引用している。そしてモーガンは、黄河の大洪水とならんで末期の元朝をさらに窮地におとし入れた自然災害として、悪疫、すなわち腺ペストをあげている。なお、モーガンの翻訳書において訳者が「中国における悪疫をも黒死病と判断するマクニールの議論はきわめてうさんくさい」と注するのは、誤解を招く恐れがあるかもしれない。マクニールが、中国史上記述の残っている悪疫をすべて黒死病であるとするならば、その判断は確かにうさんくさい。だが、マクニールの著書の文中、ならびに付録にある中国疫病年表はそうは言っておらず、「疫病」としているのである。そのなかにペストが含まれるのはむしろ当然といえないだろうか（モーガン 1993: 137）。言いかたを変えるならば、中国史上の大規模悪疫のなかに、黒死病がなかったという判断のほうがもっとうさんくさい。これは、ペストの歴史をとりあつかった書物が、しばしば聖書の中にえがかれた大きな疫病の描写をすべてペストとしてしまう過誤、そしてそれへの性急な批判と類似しているように見うけられる。

さて、このときの大流行が中央アジアに起こったと先に述べたが、それはモンゴルの空前の世界帝国建設の過程と密接にかかわりあっていた。初発地と拡散のプロセスについては、よく知られた2つの説がある。

まず第1の説。1253年から開始されたモンゴル軍の雲南・ビルマ遠征の際、それと知らずモンゴル軍は、ペスト菌の原郷と見なされるヒマラヤ地域周辺へと足を踏み入れた。その結果、兵のほとんどが疫病に斃れたという記録が残される惨憺たる遠征となったのである。かくして軍の帰還とともに、ペストはモンゴルの草原地帯へと持ちこまれた。悪いことには、モンゴル草原には、ペストの永続的な流行に不可欠の要素

である野生の齧歯類が豊富に棲んでいた。中央アジアの草原地帯が永久的なペストの巣窟となったのは、実にこのときのことであったと推測されているのである。これが、はるばる西方に伝わるという推測。

近頃有力なもう1つの説は、中央アジア、天山山脈の西北にあたるセミレチエ地域に原発したというもの。ペスト史研究で名高いポリツァーがとなえる説である。ここから、東のかた元朝治下の中国世界に伝播して1320年代後半から10年にも及ぶ大災厄をひきおこし、他方マー=ワラー=アンナフル（アム河とシル河に挟まれた地域）を経て西方に向かったものがヨーロッパの「黒死病」惨害の契機となったというのである。この説では、東から西へとペストがはるばる移動するという「壮大な」旅程は必要がない。通商を重視したモンゴル世界帝国体制下、東西の交通路は整備され、「バックス=モンゴリカ」（モンゴルの平和）と呼ばれる状況が生まれ、未曾有の人やものの流れが実現する。今までほとんど人のたち入らなかった地方に、にわかには盛んな人の行き来が見られるようになった。しかもモンゴル時代になって脚光をあびた最も主要な通商路は、旧来のタリム盆地の北と南の縁辺部を通るルートではなく、ずっと北方の、いわゆる「草原の路」であった。そしてその地域こそ、ユーラシアきっての野生の齧歯類の棲息地域だったのである。

14世紀前半期ころは、歴史に残された当時の世界のほとんどが、まれにみる大規模な天災地変に襲われていた。長期の寒冷期に代表される異常気象、洪水、旱魃、地震、その結果としての飢餓など、中国で「水旱疫蝗民饑」（『元史』）と表現される現象が世界各地で見られたのである。乱暴ないいかたをすれば、ペストやその他の疫病は、過酷な災害の項目の1つにしかすぎなかった（村上陽一郎 1983: 56-70; マクニール 1985: 139-178; リュフィエ・スールニア 1988: 102-103）。

ペストは、交通手段が飛躍的に進歩して、それまで見られなかったような頻度と速度で人間が移動できるようになったとき、あるいはまた戦争などで従来誰も立ちいったことのない地域に人間の足跡が印されるようになったり、戦乱を避ける難民が思いがけない経路で逃避するなど、なんらかの事情で、人間の往来がペストの永久的な巣窟地域にかかわったときに激発する。そのような条件が整ったとき、ペストは、特定の地域において野生動物のあいだだけで流行する疫病（epizootic）から、ヒトをも餌食にする恐ろしい致死の疫病（epidemic）に移行するのである。

ペストはモンゴル軍の遠征、そしてモンゴル世界帝国時代に、かつてないほど利用された通商路「草原の道」によって急速に拡散された（2説のいかんによっては、ペストの旅の距離に大きな開きは出るが）。13世紀の30年代から始まる恐ろしいまでの

中国の人口激減は、モンゴルの移動と拡大、そしてそれによってもたらされた広汎な動きが産み出したこの疫病によるものと考えられる。

第3の、最も新しいパンデミックは19世紀後半、清朝時代の中国から始まるもので、主としてアジア地域が被害を受けることになる。特にインドでは、20世紀前半期だけで1千万人をこえる犠牲者を出した。

本書で詳しくとりあげる中国東北部、中央ユーラシアの事例は、この大流行に属するものである。1850年代に始まり、おそらくは1959年ごろに終わったといわれているが、1世紀に及ぶ大流行により、アフリカとアジアに限られていたペストの根拠地が新大陸にも生まれることになった。

アメリカ合衆国においては、西部の大草原地帯の齧歯動物の存在が、永久的なペストの巣窟をアメリカに定着させることになり、その国はペスト発生の火種から逃れることができなくなってしまった。中国で原発したペストが、大洋横断の性能を備えた大型高速汽船によって新大陸に持ちこまれたからである。

そもそも、この大流行は、1855年、清朝軍が雲南の奥深く「回匪」を追って進軍したことがきっかけとなった。有名な太平天国の大反乱と時期を同じくして、西北（甘粛・陝西）、新疆、雲南などでムスリムの大規模な蜂起があった。反乱が燃えさかったのが同治年間であったことから「同治回乱」とよばれるものである。雲南には元朝以来住み着いている多くのムスリムがいる。その人たちと漢族とのあいだで、ときに「械闘」（武器を持って争う）へと拡大するような抗争が折にふれて起こっていた。

そんな状況のもと、鉱産の利権をめぐる燃えあがった漢回争いは、やがて、雲南一帯に居住する少数民族をも一部まきこみながら、1855年から実に18年間にもわたって雲南全体におよぶ大反乱へとエスカレートしたのであった。有名な指導者杜文秀は、明確に清朝打倒を呼号したのである。事態を重視した清朝政府は、軍隊を送りこんで徹底的な弾圧を図る（神戸 1970）。

掃討作戦のため、清軍はサルウィン河をこえたのだが、そこは、インド、中国の境界地帯で、古くからよく知られたヒマラヤ方面から続くペストの自然巣窟地帯であり、第2次パンデミックの原発地域と目される地でもあった。この地で清兵が感染してしまい、帰還した兵たちが、戦乱からのがれようとする難民とともに、各地に流行の火種をまきちらした。爆発的な流行がおこったのは、中国南部の港湾都市にペストが達したときである。広東（広州）では、1884年の前半だけで10万人の死者が、そして近隣の香港にも多くの避難民が流入したこともあって10万人近くの犠牲者を出した。2つの大港湾都市には多くの外国人が居住しており、事は国際問題となった。かくて、

多くの専門家が国の別を問わず集まり、精力的な防疫活動をくりひろげた。その際、フランスのアレクサンドル＝エルサンと北里柴三郎が、それぞれ別個にペスト菌を発見するという大きな歴史的成果もあった。

さて、これら中国南部の大港湾都市に出入りする船舶によって、ペストは中国の諸都市へ、さらには先にも述べたように、外国にも「輸出」されることになって行く。

北に向かったペストは、1899年牛荘、1908年唐山にはいりこみ、唐山ではその年1000人にも及ぼうかという犠牲者が出た。次に述べる1910年からの大流行は、北方からの感染経路によるというのが通説となっているが、それとは別に、「満蒙」地域へは1899年段階にはすでに山東省からペストがもちこまれていたとする、在北京フランス公使館付医官マチノンのごとき説もある（豊田 1935: 84）。20世紀初頭、「満蒙」地域は、北から南から、まさにペスト禍の包囲網下におかれていた観がある。

Ⅵ-3 1910-11年以後の「満洲」地域におけるペスト大流行、その後

1910(明治43)年10月下旬、当時のロシア東清鉄道の満洲里駅付近で最初に発見されたペストは、燎原の火のような勢いでまたたく間に南下し、のちに恐ろしい肺ペストとなって翌年まで猖獗をきわめた。ザバイカル地方で腺ペストの流行が起こり、そこから満洲里にやってきた2人の狩人が咯血して死んだのが初発であった。

発見間なしに哈爾濱市の内部に入りこんだペストは、あらたに建設されたばかりの鉄道によって急速に周辺に広がっていった。巨視的に見れば第3次のパンデミックに属するこの大流行により、記録にとどめられただけでも約5万人以上の人たちが死亡した（関東都督府臨時防疫部 1912）。

ちょうどその時期は春節とあって、主として山東・直隸（河北）両省出身の出稼ぎ「苦力」や農民が里帰りのため一斉に南下した。その総数20万人ともいわれる大移動である。その途上で発病した者が数多く、結果として東三省全域はいうに及ばず、華北各地にペストが撒布されることとなったのである。総じて、犠牲者のほとんどが、その日の宿さえおぼつかない中国域内から出稼ぎに来ていた貧困な階層に属する人たちであったため、統計にすくいあげられることなく人知れず死んでいった者も多かったと想像され、実際の死亡者数は大きくこれを上回るといわれている。

1911(明治44)年、東三省総理衙門所在地である奉天（現瀋陽）に委員組織の臨時防疫部が設置され、世界中から専門家を召集し、衆知を結集して、肺ペスト防遏にあたることとなった。

このときには、ペスト菌の発見者の一人である北里柴三郎も駆けつけ、ペスト流行

にともなって広がる流言蜚語や社会不安に対抗すべく、啓蒙活動などに尽力している。

次の大流行は1920年から始まった。1920年夏、ザバイカル方面に起こった腺ペストが南下、8月末、満洲里近郊でロシア人少女2人が発症したのが皮切りであった。

9月下旬には海拉爾でタルバガン猟師の間にペストのような症状が発生、19名が死亡する。そして秋10月ははじめになって、同地の毛皮工場でペストが発生したのである。1ヶ月で肺ペストに姿を変え、鉄道沿線各地に広がり、結局終息までに8500人以上の死者を出してしまった。

また1927年からの通遼を中心とする流行では、500人規模の犠牲者を出した。張作霖が、モンゴル人懐柔のために招いたともいわれていたパンチェン=ラマのダルハン王府巡錫が契機であった。その一行、ならびに付きしたがう多くの信者たちにまぎれて、ペストももたらされたともいわれている。その一大集団のなかには、同地へ到着する以前、すでに多くの死亡者が出ていたという (Wu 1929: 283-288)。

1932年、その地に、日本の大陸侵略によって傀儡国家「満洲国」が出現してからも、ペストは毎年やすむことなく襲いかかる。

発生範囲は、「満洲国」下の5省(吉林・龍江・奉天・熱河・興安)23県旗にも及んだ。そのうち患者が特に多く発生した年だけをあげても、1933年の約1596人、1934年の928人、1938年の674人、1939年の637人、1940年の2548人、1941年の705人、1942年の879人、1943年の1963人など、いかにその脅威が大きく、また広い地域に及んだかを十分にうかがわせる(春日 1986: 29-30)。

終戦の年である1945年にも統計上記録はされていないが、5月から8月にかけて大流行があったとされ、8月15日の終戦以降、新京、奉天にも侵入していたという。

「満洲国」時代には、「満洲国」と満鉄が手分けして防疫にあたり、前者は農安県、後者は通遼県にそれぞれペスト調査所を開設、その下部組織として、交通の要所11ヶ所に隔離所、そのほかの要地に9ヶ所の監視所を置いて、警戒をおこなった。しかし広大な流行地域のすみずみに目を届かせることは困難で、その奮闘にも限度があった。

ヒトの動きが活発であればあるほど、また交通手段が発達すればするほど、いったん発生したペストは蔓延の勢いを増す。まして、1910、1921年の2つの場合は、肺ペストとなったため、ノミや媒介獣である齧歯類の動物がいなくても、感染者の移動・接触によって拡散するのであるからまことに恐ろしい。自由な意思をもって動きまわるヒトと、棲息地がおおむね定まっている野生動物とでは、防疫措置としてとりうる手段の面で全然事情がちがってくる。

VI-4 媒介動物としてのタルバガン

ペストは、ヒトが感染するまでの段階において、感染源やその経路などが、人間社会とかけ離れた場所にある伝染病なので、いつどのように現れて、どの時点で消滅したのか、明瞭でないことが多い。それゆえ、ペスト流行の一つ一つのプロセスを明確に把握するのが非常に困難なことも否めない。そうした曖昧さを残さざるをえない背景もあって、ここで話題にあげるタルバガンがペストを媒介するという説には異論もある。

タルバガンに対する異論の起こりには、いささかこみいった事情があった。より正確に言うならば、タルバガン毛皮の大産地、ロシア側のお家の事情である。

1910-11年、東三省地域に暴威をふるった肺ペスト大流行に対して、総合的な調査

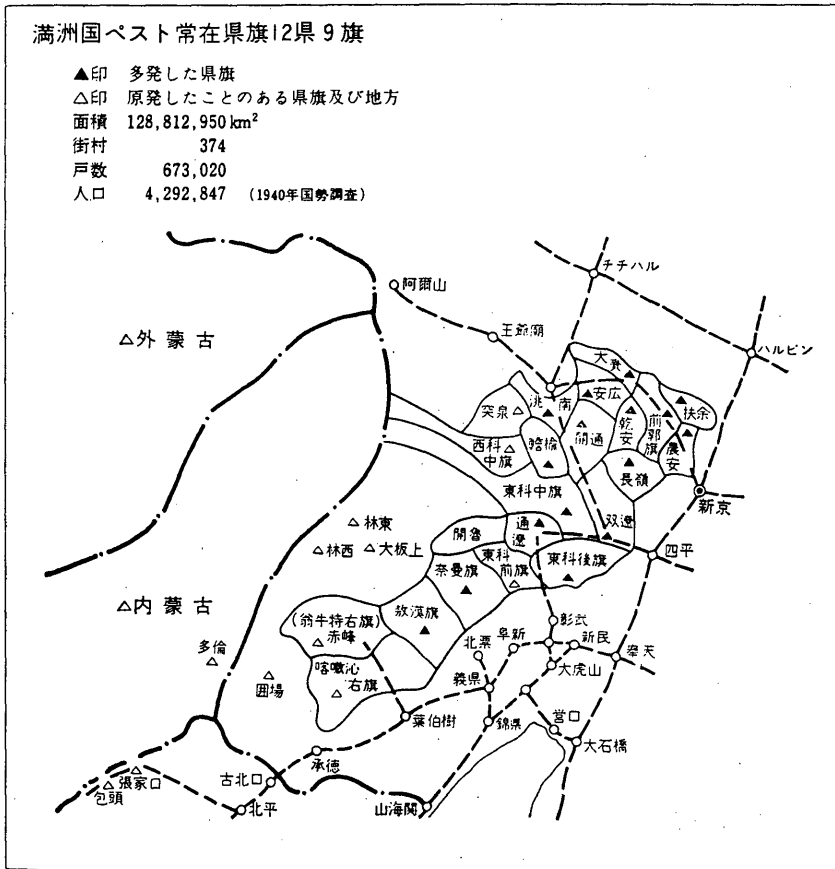


図5 「満洲国」のペスト病巣地 (春日 1986) より引用。

をおこなうべく、万国ペスト会議 (International Plague Conference) と称する国際的な防疫研究組織が設立された。前記北里柴三郎の奉天入りもこの会議の委員としてであった。奉天で開かれたこの会議においては、古来広く信じられていたタルバガンからペストが広がり始めるという説が大勢を占めたが、このときロシア側委員は強硬に反論を唱えつづけた。ペストがロシアのタルバガン猟師から流行が広がり始めたという説を、「明確な証明ナキヲ以テ之ヲ認ムル能ハス」と批判し、1898年以降「満蒙」地域には地方病として発生しているのであり、強いてタルバガンと結びつける必要はないと断じたのである。

そのときの調査では、確かに「明確な証明」の材料はなく、1911(明治44)年4月3日から同20日までほとんど毎日開かれたこの会議での決議(1及3部決議)は、次のような奥歯に物のはさまったようなものとなる。

- 一 露国医界ニテハ「タルバカン」ニ一種ノ伝染病流行シ「ペスト」ニ類似スルモ果タシテ真正「ペスト」ナリヤ未タ細菌学的証左ナシ
- 二 今回ノ「ペスト」カ「タルバカン」ヨリ伝染シタルモノナリヤハ確實ノ証拠ナシト雖モ「タルバカン」病カ満洲里「トランスバイカル」及北東蒙古地方ニ於ケル「ペスト」ト密接ノ関係アルモノノ如ク今回ノ肺「ペスト」モ之ニ原因シタルモノト推定シ得ヘシ
- (中略)
- 六 齧齒動物間ニ伝染病発生ノ場合其発見ニ努ムルト共ニ速ニ之ヲ調査ニ提出セシムヘキ方法ヲ講セサルヘカラス
- (中略)
- 八 季節ヲ見計ヒ研究員ヲ満洲里地方ニ派シ「タルバカン」捕獲隊ヲ組織スヘシ
- (後略)

(関東都督府臨時防疫部 1912: 367-368)

タルバガン原因説に反対しているのはロシア代表であるということ、ヒトの世界でのペスト流行にタルバガンが深く関わっているということは否定できないこと、もってまわった文面ではあるが、この2点だけは明確に伝わってくる。中国側のスタッフとして、研究会議において主導的役割を果たした伍連徳博士も、当初タルバガン原因説にまっこうから反対していたが、のち事実上撤回するにいたる。

1910年の夏、ザバイカル地域に起こったタルバガン=ペストに起因する腺ペストの流行が発生し、一大肺ペスト禍へとエスカレートして行く。これが、前記決議にもか

かわらず、普通に考えられていた経路であった（豊田 1928: 463）。そうした考えにしたがえば、その年の10月、満洲里にやってきた中国人猟師2人が咯血して死亡したのが、把握された限りにおける初発であったと。

日本側のこのときの公式記録は、『明治四十三、四年「ペスト」流行誌』であるが、同報告書はこの決議を掲載した個所において、「従テ今次流行セン病毒ノ起源ノ何レニアルカハ寧ロ問フヲ要セサル所ナルヘシ」と文を結んでいる。

また同書とともに、「尚能ク文筆ノ尽クス能ハサルモノアリ。百聞一見ニ如カス。乃チ本帖ヲ編纂附録スルコトナセリ」という序文を付した『明治四十三、四年南満洲「ペスト」流行誌附録写真帖』も同時刊行された。この写真帖には、防疫の最前線における遺体処理のありさまなど、凄惨な情景が数多く収録されていた。この『写真帖』の冒頭の3図は、いずれも「北満地方ニ産スル『タルバガン』」と題されたB5判全頁大のタルバガンの「肖像写真」である。ペスト学の世界的権威が一堂に会して検討した結果を収録した報告書アルバム、それも冒頭に複数葉、タルバガンの図が掲げられていることは、学者たちの見通しがいずれにあるのかを雄弁に物語っている。

1920-21年のペスト流行に際しては、ほんの10年前の大災禍の際の貴重な経験、研究成果をふまえ、満鉄衛生課長鶴見三三博士らは「疫学的観察」として「今回知り得タル事実ニ鑑ミ『タラバガン』ハ之ニ関係アルモノノ如シ、換言セハ『タラバガン』族間ニ於ケル本流行ハ、人類ノソレニ先タツモノト思考ス」と結論している（満鉄地方部衛生課 1923: 57）。

そればかりではない。のちに、東三省地域に続発するペスト禍に対抗すべく、東三省防疫事務総処という組織がつくられたが、そこで刊行された *North Manchurian Plague Prevention Service Reports*（『東三省防疫事務総処報告大全書』伍連徳編）という年次報告書叢書の、表紙の四隅に配置された円形のなかにデザインされているのは、漢字で「旱獭」、モンゴル字で「tarbaya」、タルバガンの姿の絵、それにペスト菌の写生である。専門家たちによる名指しの、念入りな、タルバガンに対する「告発」である。

こうした論議が背景にあつてのことだろうが、齊齊哈爾においては、1921年から25年まで、タルバガンの捕獲およびその毛皮の運搬、売買を禁じる措置がとられた。もっともこの禁令も、東支鉄道沿線にしか適用が及ばなかった。タルバガン毛皮の売買に従事する人たちは、抜け目なく張家口経由で中国へ、また北モンゴルのウランバートルを経てロシアへ送るなど、他方面へと流通経路をきりかえて対抗したので実効はあまりあがらなかった（Lukashkin 1938: 72-73）。



図6 タルバガン [右上: モンゴル文字, 左上: 漢字, 右下: 図像] のデザイン。左下はベスト菌。(京都大学付属図書館所蔵本)

タルバガンに対する研究がそれまでほとんど見られなかったということが、こうした不明瞭さの背景にあったこともいめない。皮肉なことではあるが、タルバガンについての動物学的・疫学的研究が最も精力的におこなわれ、さまざまな知見を得ることができたのは、まさに第3次パンデミックに付随してのことだった。

特にロシアにおいては、1910年の「満洲」における大流行以前から、各地でベストの流行があり、野生の齧歯類研究については一歩抜きで経験を持ちあわせていた。

もともと中央ユーラシア帯の原野にはベストの散発が見られたからであり、それらの地域の大半がロシア領であったからである。たとえば、1877-79年にはカスピ海沿岸のバクー、アストラハン、ボルガ下流域などで流行を見た(春日 1986: 25-26)。また東方では、ザバイカル地方が、1910-11年、1920-21年の「満洲」における大流行の発源地とも考えられていたことはすでに述べたとおりである。そのロシア(ソ連)が、タルバガンへの「責任」追求に積極的でなかったということの意味は小さくない。

だが、状況は時代の推移とともに変化する。ソ連のベスト研究がその知見を明らかにするようになったのである。1965年、ソ連でWHO主催のベスト=セミナーが行われ、その席でソ連の研究者が発表したところによると、同国内には10ヶ所の比較的独

立したペスト病巣地域がある。その分布は、全体として、アゼルバイジャンから中国東北地方までの広い地域に及ぶが、そのうち菌保有動物としてタルバガンの役割が名指しされているのは、

- ①カザフスタンとキルギスの境界地域の天山山脈（なおここは中国の新疆地域の病巣地と関係があろう）。
- ②アレイ溪谷及びバミール地域。
- ③モンゴリア、中国のダライノール北方およびシベリアの接壤地域にあるザバイカル地方。

などの諸病巣地域についてである。タルバガンの棲息している地域のほとんどが、ペストの病巣地と目されていることになる（春日 1986: 26-27）。

1910年からのペスト大流行の発端は、最初タルバガンのあいだの流行病であったのが、タルバガン猟師へと伝染し、それが「ヒト=ペスト」となる契機だったと一般にいられている。ルカーシキンによれば、ザバイカル、モンゴル、フルンボイルなどの地域においてペストの被害を受けた者は、タルバガンの疫病にかかったタルバガンの生皮を剥いだか、その脂肪部分を切りとったか、あるいはその肉を食べたか、この3つのいずれかのプロセスにかかわっているという（ルカーシキン 1937: 71）。

1910年からの大流行に先だって起こった、こうした症例がいくつか知られている。

1906年夏、ザバイカル地域のアボカイツュー帯では死んだタルバガンが非常に多く見られ、在地の住人たちはそれに接触することを極度に警戒していたという。折りもおり、9月下旬、1人の健康なコサックが死んだタルバガンの肉を食べて発症し、数日にして死亡する。この者にかかわりをもった8人が感染し、やはり死亡する。すべて肺ペストであった（関東都督府臨時防疫部 1912: 290-291）。

1907年には、タルバガン猟めあてに新たに移り住んできたコサック猟師の一家が犠牲となっている。そのコサックは、病気のように見える著しく衰弱した1匹のタルバガンを捕らえてきた。彼は、この地に長く住む老人の忠告を無視して、タルバガンの毛皮を剥いだ。さすがに肉を食うことは思いとどまって、13歳になる少女マトゥレナ=フィリップポアに野外へ捨てに行かせる。その少女は裸足で、タルバガンの死体を携えて、草をふみわけ草原に捨てにいったという。少女は左くるぶしに擦過傷を負っていた。翌日少女の左股腺が腫れはじめ、やがて顕著なペスト症状を示し、発病後治療のため送られた満洲里の病院において、11日にして少女は死亡してしまう。このような前兆めいた出来事があり、1910年からの大流行が起こるのである（関東都督府臨時防疫部 1912: 291; ルカーシキン 1937: 80-81）。

そうしたプロセスは、実は、その地域では、古くから何度も見られた現象であった。いくつか例をあげてみよう。1893(光緒19)年、ハラノールにおいてイタムチェプというモンゴル人のタルバガン猟師は、病気のタルバガンを捕らえ、しかもその肉を食べた。その結果、猟師は死亡し、その家族も犠牲となった。感染は近隣の30家族に広がり、総計数百人が犠牲となった。1905(光緒31)年、マラカタラにおいて、チンチェンというモンゴル人タルバガン猟師も、罹病しているタルバガンを捕らえその肉を食べて死んだ。20人以上が感染して死んだが、他の近隣の人はあわてて逃げたので、さらなる拡散はなかった(Ch'eng Teh Yun Chai 1926: 108)。判で押ししたような決まったプロセスをたどって悲劇が起きている。

新疆地域においても、似たようなケースは見られる。新疆維吾爾自治区檔案局の檔案には、1901(光緒27)年、1914(中華民国3)年、瑪納斯、呼圖壁において「鼠疫」が流行したとある。いずれのケースも、牧童が死んだタルバガンを拾ってきて、皮を剥いたりして一兩日のうちに発病し、数日で死んでいる。光緒27年の流行は50日あまり続き、200人以上が死亡、民国3年には半月ほど続いて60人ほどが犠牲となったと伝えている。病んだ、あるいは死んだタルバガンに手を出したゆえの悲劇であることが、今となってははっきりとわかる(袁 1994: 1520, 1521)。

現代のモンゴルにおいても、ペストは依然として発生し、その地の人たちに恐れられている。紀行文や報道などからひろいあげてみよう。

1990年夏、モンゴル国の西端に位置するバヤン=ウルギー=アイマクのウリヤンハイ族の宿営地をジープで訪れたティム=セヴェリンの一行は、たまたま巢穴のそばで死にかけてタルバガンを発見した。セヴェリンは、同乗の医者への驚愕ぶりと、そのあとのあわただしい対処をまのあたりにする。くだんの医者は同乗者に厳しく注意し、自分の口と鼻をハンカチでおさえ、すぐに車を移動させ、近くにいた牧民に今見た光景を説明してやった。すると牧民たちは、ただちに馬群をタルバガンの巢穴から遠ざけたという。その場所近辺のウリヤンハイの人が、谷で小さい齧歯類が死んでいるのを見ていたことも明らかとなる。

首都に帰ってすぐに、セヴェリンとこの医者は厚生大臣に会い、この事件を報告する。その際、彼らは医師でもあるニャムダワー大臣から、モンゴルのペスト事情についてレクチャーをうけた。実は、その前の月にも、こんな事件があったという。

ある牧民の子が、イヌのとらえてきたタルバガンで遊んでいた。父親は毛皮を得ようと、そのタルバガンの皮を剥いた。一週間ほどたって、家族の何人かが高熱と頭痛に苦しめられた。けれども、そのときはタルバガンの禁猟期間中だったので、一

家は問題を起こすのを恐れて発病を報告しなかった。そこには他に3軒のゲルがあったが、すぐに病気は広がり、全部で15人の住人のうち、11人が感染し、5人が死亡したというのである（セヴェリン 1994: 309-329）。

モンゴルの新聞『アルディン=エルフ』が伝えるところによれば、1993年、「タルバガンによる伝染病」は、前年比50%の増加を示した。すなわち、6つのアイマクにおいて19人が発病し、7人が死んだ。発病者のうち、タルバガンから伝染した者が13人、他は人から感染したという。罹病者と接触した可能性のある686人が特別の治療を受け、1700名もの人が観察下におかれた。

1995年夏には、ゴビ=アルタイ県でタルバガン伝染病（ペスト）発生の兆候が発見された。国立衛生微生物疫学研究所は、ただちに兆候のある患者について厳重に調査した。結局それはペストと判明するが、結論が出るまでの灰色の期間、同県への飛行機の航行、車両通行がさし止められた。また検査結果が出ないまま首都方面に向かった人たちは伝染病クリニックおよび自然病原性疾病対策センターによって隔離された。ペストが発生したことが確認されると、この措置は解かれ、かわって飛行場、沿道での医師による厳重なチェックがおこなわれた。モンゴルには、発生した事態に即応できる体制が設定されていることを窺わせる事実経過である（『アルディン=エルフ』1995年9月14、15日）。

1996年8月にも、ゴビ=アルタイ=アイマクのジャルガラ村で、ペストと思われる伝染病が発生している。罹病した少年の腋の下のリンパ腺が大きく腫れ、きわめて悪い状態にある。アイマクの医療関係者によれば、これは腺ペストである。この患者と接触した26名は隔離されているとのこと。同月、同アイマクのハウリン村から首都ウランバートルの伝染病研究所に入った報告によれば、肺ペストで1人が死んだ疑いがあるとのこと。隔離後に死亡したもの。ただちに首都から研究所のスタッフが同地へ調査に赴いたという（石原 1996: 3）。

さて先にも述べたセヴェリンへの厚生大臣の説明によれば、モンゴル国の国土の約6割がペスト菌の「自然貯蔵庫」になっており、その中に人間が発病した個所が点々と散在しているという。モンゴルには、ペストを媒介する齧歯動物が無数に存在し、疫病は巣穴から巣穴へと移動感染するので、ペストを絶滅させることはほとんど不可能であると。

厚生省はペスト防止のため、夏のペスト流行期にさきだって、以前この疫病が発生したことのある地域に行き、齧歯動物を捕らえ、ペスト菌の有無を調べる。保菌動物がいれば、地方当局を通してタルバガン狩を禁止する。できることと言えば、せいぜ

いそのくらいである。だが国土はあまりに広く、調査スタッフの数にはおのずと限りがある。だから、けっして十分とはいえないこの措置すら、徹底厳守されるにはほど遠いという。しかも、社会主義体制時期のモンゴルにあっては、ペストはそれが国内に存在することすら公には認められてはいなかったという。「人民の健康に関して長年努力してきた」この国に、そのような病気が残っているはずはないというわけだ。ペストなどいちはやく克服したという建前が通用していたのである。しかし、そんな恐るべき状況があったということが公然と語られるようになったこと自体は、大きな前進と評すべきなのかもしれない（セヴェリン 1994: 322）。

Ⅵ-5 モンゴルにおけるタルバガン狩りの知恵

先に述べた、大濫獲とも評すべき、ほぼ20世紀に入ってからの情勢以前においては、モンゴルの牧民たちの間では、タルバガン狩猟に際しては、神話や伝承というかたちで、おのずからなる規制が行われていた。そしてそれは、疫学的観点からしても、実に適切と思われる掟となっていた。

タルバガンの死にかたが不分明な場合が多い罌の使用をいましめあう。先にあげた、燻らしたタルバガンを回収せずに放置することを禁じた18世紀初頭のモンゴル法令も、死亡に至る経過がわからない死体を残すのを恐れて設けられた規制であるという見方もできる。眼前にいる個体の状態を、よく確認した上でなければ狩猟に着手しない。あるいはできるだけ射殺し、その場で獲物を回収できるようにする（ルカーシキン 1937: 82-83）。

また、動作の鈍いものや、警戒心の見られないもの、群から離れている個体は危険である。先述したまことに奇妙かつ迂遠ともいえる狩猟法も、こうした状況を十分に確認できるという利点は備えている。

さて、ペストに罹ったタルバガンは、食事をとらず、鳴き声をあげず、この動物独特の後ろ脚で立つという動作もしない。またペストに罹ったタルバガンの眼は、乳白色を呈している（そして恐らくはそのような段階では視力を失っている）ともいわれる。ザバイカルで採集されたペストにおかされたタルバガンは、まわりの様子もよく見えないような状態で、後肢が麻痺でもしているように、ひきずって、両目も濁っていた（ルカーシキン 1937: 71）。罹病した個体は、みずからの巣を離れる、あるいは同じ巣穴に棲む仲間たちが、ただちにその哀れなタルバガンを巣穴の外へと追いやってしまうといわれている。また猟師が巣穴に近づいてきたとき、健康なタルバガンは、カチカチと2、3回、はっきり聞こえるような鋭い歯音をたてて、穴のなかに

姿を消すのだが、音を立てずにひっこんだり動作が鈍いのは病気と判断するのだともいう（ラムステッド 1992: 76）。

ある個体にとどまらず、群全体の様子が普通でないと思われるときには、集団ごと疫病にかかっているケースが考えられる。そうした場合、当然のことながら、実に容易に、またたくさん捕獲できるわけであるが、ペスト罹病の危険を考慮し、あえてその場からなるべく急いで離れるべきである。つまり、生きのよいタルバガンを視認にして銃で射殺するかぎり、そしてハンター側に最低限の常識——つまり疫病にかかったタルバガンは捕獲しないという——さえあれば、人間社会にペストの原因がもちこまれる危険性は低くおさえられるといえる。だが、生前の状態が視認できない、畏獣、毒殺、さらには、なんらかの理由ですでに死んでいるタルバガンの死屍を採取するような方法では、捕獲時におけるこうしたチェックは当然なしえない。

先の民話にもあった、タルバガンの肉を食べる際、脇の下の部分を取りのけるならわしも、腋窩部のリンパ節が腫大する典型的なペストの病型を経験的に知っているからこそである。この点については、ラムステッドも言及しており、「モンゴル人はタルバガンのわきの下を入念に調べて、前脚の付根に、モンゴル人が『人殺し』と呼ぶ腫物が見つかったら、その獲物は決してつかわない。しかし中には卑劣漢がいて、病気のタルバガンの皮を剥ぎ、たった3カペイカの儲けのために何も知らない商人に売りつけることがある。たった1匹分の皮が、中国人やロシア人の間に死病の恐怖をまき散らすこともできる」と、慨嘆している。なお、ラムステッドは、その前脚の付根の部分にあるピンク色の肉を、「人殺し」と言ったかどうかは未詳だと注で特記している（ラムステッド 1992: 77）。1929年当時、ザバイカルのロシア人猟師は、モンゴル人のいましめの伝承をよく知っており、それに従って、タルバガンを食用とするときには腋下の腺を必ず切除していたという（ルカーシキン 1937: 43）。

致死の疫病が発生してしまった場合、その地の人たちにできる防衛手段は、それを拡散しないこと、そしてそれ以前の心がけとして、伝承などによって得た用心のための手だてをつくして、自分は決して罹病しないようにすることくらいであった。

たとえばモンゴルの習慣として広く知られている、他家を訪問した際の最初の挨拶、イヌを見てくれ、あるいは、イヌをつなぎ止めてくれ、という呼びかけには、次のような意味があるともいう。その声に答えてゲルから住人が出てくればよし、もし出てこなければ、ふつうは留守だと判断される。だが、もしかすると、ゲルの内部で住人が死の床にあったり、既に息絶えていたりする可能性もあるではないか。そんななかに入って行くのは、明らかに自殺行為である。だから、呼びかけに応える者がなければ

ば、馬からおりないというならわしができたのだと（セヴェリン 1994: 319）。

こうした慣習でよく知られているのは、疫病に襲われた者がでたさいに、標識を出してその事実を周辺の人たちに知らせるという措置である（ジグムド 1991: 80）。モンゴル語でタブーを意味するツェール（*čeger*、「禁忌」「禁制」の意（内蒙大蒙語研 1976: 1220））というのがその標識で、古くは13世紀モンゴルを訪れたプラノ＝カルピニのヨハンは次のようにいう。病人が危篤状態となると、そのゲルの上に黒いフェルトを巻いた槍をさしておく。すると誰もそのゲルには近づかないと（カルピニ・ルブルク 1965: 15）。ややのち、やはりヨーロッパからの旅行者ルブルクのウィリアムも、ゲルの上の標識のある家には看護人以外の人は出入りが禁じられていると言い、さらに「大きい本営に病人が出ると、その本営のまわりにかなり離れて見張りを立て、その境界線以内へは誰ひとりいけません」と、同様な記録を残している（カルピニ・ルブルク 1965: 155-156）。

また、タルバガンが豊猟なのは、ベストがその動物の間に蔓延しているかもしれないことを意味する。細心の注意が必要である。こうした知恵、すなわち慣習的な規制措置は、その地の人たちを、目の前にあるベストの危険からかなり効果的に護ったのである。

このような視点から見ると、とりわけ大きな問題となるのは、そうした長年にわたって蓄積されてきた「知恵」を知らない、外部からやってきた捕殺者である。彼らにとっては、目当てのタルバガンが病気であろうがなかろうが、そんなことは眼中にはない。現地の人からの制止を受けたとしても、聞き入れる者は稀であったろう。それは、在地のハンターたちが伝承してきた、経験則にもとづく貴重な防御手段が、事実上、絶えることを意味した。なるべく多くの毛皮を得ようと、罾で捕りまくる連中にとっては、病気で倒れたものであろうが、瀕死の状態でさまよっているものであろうが、1匹の獲物は1枚の毛皮である。むしろ手間いらずで捕らえることのできた幸運な獲物ということで、喜んで手にしたのであろう（Nathan 1967: 2）。

1923(大正12)年以来、革命後も庫倫で唯一の私営病院を開き、現地のモンゴル人たちから深い信頼を得ていた岐阜県出身の医師児島岩太郎は、革命後もその街にいた最後の日本人となっていた。当時、すでにウランバートルと改称されていたその街から結局「脱出」した児島の証言によれば、1929年末以降、人民の武器携行が禁じられ、銃器によってタルバガンを捕ることさえできなくなってしまったという（小川 1930: 76）。1927年から、タルバガンが「法律を以って」保護されるようになり、最大の群棲地いくつかを全面的禁猟区とし、猟期も8月20日から1ヶ月間と定め、銃猟

以外の狩猟手段を禁じていた（ルカーシキン 1937: 88）。

だから29年末の禁止措置は，タルバガン＝ハンターにとっては，それが唯一の猟法であったことから，激甚な打撃がもたらされたのである。銃によるタルバガン狩猟者たちは，取り締まる側から見れば，銃器所持層として無視しがたい集団として認識されていたことがわかる。銃を使用するタルバガン狩猟者だけでも相当な人数がいたことが窺えようが，いわんや，その他の一般的な猟法をなす人たちは，おびただしく存在したことも容易に想像できる。

そして，防疫という観点からこの事態を見るならば，やっかいな出来事が生起する可能性はずっと高まることになる。すなわち，銃猟の可能性が閉ざされると，いきおい罾猟が普遍的におこなわれざるをえない。猟師たちは，タルバガンの群棲地にたくさん罾をしかけ，定期的に見まわり，うまく罾にかかったタルバガンがあれば，それを回収するというスタイルが日常化するわけである。すべての場合，罾にかかってジタバタしているタルバガンを回収する結果に終るとはかぎらない。点検時にすでに死んでいた個体も少なからずあろう。そうすると，それが生前「生きのよい」健康なタルバガンだったのか，そうでないのか，最悪の場合には動物間流行の段階のペストにかかり，蹠蹠として徘徊するあいだに罾におちたものもいたかもしれない。

ある程度は，外見，たとえば肥瘦の度合や毛づやなど，判断する要素はあるかもしれないが，それにはタルバガン＝ハンターとしてのある程度の熟練が不可欠だ。外来のにわか猟師の力量には，狩猟技術だけでなく，その種の関連知識の面でも，おのずと限度がある。金になるタルバガンの皮，それしか目に入らない者たちにとって，在地の人たちの配慮など，関心事ではありえない。そのまま看過して，あるいは気がついていてもその危険性をば無視してしまい，皮をはぎ，肉を食べ，その過程でヒトの間にペスト菌が侵入する場合もあろう。

VII 終章 タルバガンの不幸

さて，上に見てきたように，タルバガンは，人の社会と密接なつながりをもつ野生動物である。モンゴル牧民によって，深刻な体験にもとづく慎重な配慮のもとに，自家消費的に捕殺されていた事態が一変し，19世紀末頃からロシア市場で，また20世紀初頭からはヨーロッパ市場において，毛皮資源としての新しい価値が見出されるや，大濫獲の憂き目をこうむるようになった。ヒトが，タルバガンの属する（野生の）世界に深く関わってしまったため，野生の世界（だけ）において，タルバガンの間に伝

えられてきた流行病 (Tarbayan taqal) が、ヒト社会にも *Yersinia Pestis* として伝播し、激甚な災厄が現出することとなった。ヒトが生態系に関与したときに、受けるかもしれない最も手ひどい復讐が加えられたと言うべきか。ヒトと野生の区画が峻別されていれば起こらなかった事態で、その境界線を踏みこえるのは常にヒトのほうであった。

「元凶の」動物は、タルバガンでなくてもよかった。*Yersinia Pestis* の運び屋となる可能性そのものは、実に多くの野生動物がもっているのであるが、たまたまタルバガンが、大きな体軀と、有用な毛皮を備えており、しかも狩猟しやすい棲息形態をもっていたことが、ヒトとがっちり結びつけられる契機となり、ここで述べたようなタルバガンに関わるさまざまな問題を生起したのであった。タルバガンに接する際の、過去の経験に即した伝承などの形で受け継がれてきた注意事項は、新参者たちによってあっさりとは無視され、悲劇が発生することになったのである。タルバガンとヒトの葛藤のいきさつは、野生とヒトの世界のありようを考えるさいの、ひとつのヒントになるかもしれない。

文 献

- アンドリュース (アンドリュース), R. C.
 1941 『蒙古平原を横ぎる』(新日本國叢書Ⅵ) 内山賢次訳, 東京: 育生社弘道閣。
 Атлас
 1954 Главное управление геодезии и картографии МВД СССР. ред, Атлас мира. Москва: ГУГК МВД СССР.
 Benedict, C.
 1996 *Bubonic Plague in Nineteenth Century China*. Stanford: Stanford U.P..
 ブーリエール, F.
 1976 『ユーラシア』波部忠重訳, 東京: タイムライフブックス。
 カルピニ・ルブルク
 1965 『中央アジア・蒙古旅行記』(東西交渉旅行記全集 I) 護 雅夫訳, 東京: 桃源社。
 Ch'eng Teh Yun Chai
 1926 A Mongolian Chief's Description of the Tarabagan. *North Manchurian Plague Prevention Service Reports V* (1925-1926), 108-109, 天津 (伍連徳編纂『東三省防疫事務総処報告大全書』民国15年)。
 クリステイ, D.
 1938 『奉天三十年』下 (岩波新書) 東京: 岩波書店。
 Cleaves, F. W.
 1982 *The Secret History of the Mongols*. Cambridge: Harvard university press.
 江上波夫
 1948 「匈奴の奇畜, 馱駝・駒駝・驛駝に就きて」『ユーラシア古代北方文化』pp. 177-224, 京都: 全国書房 (原載『池内博士還暦記念東洋史論叢』1940)。
 榎 一雄・岡田英弘・松村 潤・本田實信
 1961-64 『欽定西域同文志』上・中・下・研究篇 (東洋文庫叢刊16) 東京: 東洋文庫。

原山 タルバガン、野に満ちし頃

グレッグ, C. T.

1980 『ベストは今も生きている!』和氣 朗訳, 東京: 講談社。

原驥四郎・中山東一郎

1919 『満蒙の皮革』(農事試験場彙報8)大連: 満鉄農事試験場。

ヘディン, S.

1939 『北京より莫斯古へ』高山洋吉訳, 東京: 生活社。

ヘロドトス

1967 『ヘロドトス』(世界古典文学全集10)松平千秋訳, 東京: 筑摩書房。

忽思慧

1993 『薬膳の原典 飲膳正要』金世琳訳, 東京: 八坂書房。

飯島 茂

1921 「百斯篤病毒ノ媒介獣ナリト称セラルル早類ニ就テ」『軍医団雑誌』104, 667-673。

石原乙四郎

1996 「モンゴルは今——ラジオウランバートル日本語放送——(1996年8月26日放送分記録)」『しゃがぁ』11(付録), 2-3。

岩田 稜

1927 「外蒙の肺『ベスト』を南満からのぞいて」『日本公衆保健協会雑誌』3(9), 24-28。

開高 健

1989 『オーバ、オーバ! モンゴル・中国編』東京: 集英社。

神戸輝夫

1970 「清代後期の雲南回民運動について」『東洋史研究』29(2・3), 118-146。

関東都督府臨時防疫部

1912 『明治四十三、四年「ベスト」流行誌』(同『明治四十三、四年南満洲「ベスト」流行誌付録写真帖』)旅順: 関東都督府臨時防疫部。

春日忠善

1986 『日本のベスト流行史』東京: 北里メディカルニュース編集部。

Казакевич, В. А.

1930 *I. Намогильные статуи в дариганге; II. Поездка в даригангу. Материалы комиссии по исследованию монгольской и танну-тувинской народных республик и бурят монгольской АССР в. 5, АН СССР., Ленинград.*

ケナン, G.

1996 『シベリアと流刑制度』全2巻(叢書ユニベルシタス519, 520)左近 毅訳, 東京: 法政大学出版局。

小林高四郎

1940 『蒙古の秘史』東京: 生活社。

倉内喜久雄

1930 「内蒙古ニ於ケル「ベスト」ノ流行ト該地ニ棲息スル齧齒類トノ関係(「ベスト」ニ関スル研究其二)」『満洲医学雑誌』12(5), 671-704。

旭鷲山昇

1997 『自伝 旭鷲山——大草原から土俵へ——』東京: ベースボール・マガジン社。

ラルソン, F. A.

1939 『蒙古風俗誌』東京: 改造社。

Lessing, F. D.

1960 *Mongolian-English Dictionary*. Los Angeles: Univ. of California Press.

李時珍

1954 『本草綱目』上海: 商務印書館。

Lubsang

1980 *Monggol em-ün oyilalya*. Öbör Monggol-un arad-un keblel-ün qoriya.

Луузаншарав

1960 *Залуу анчдад огох зоволгоо*. Улаанбаатар: Б.Н.М.А. Улсын Ходоо Аж Ахуйн Яам.

ルカーシキン

1937 『タルバガン』(北経調査刊行書12)哈爾濱鉄路局北満経済調査所訳(未刊行の手稿)

- よりの訳出 (Тарбаган или Забайкальский сурок) 哈爾濱：北滿經濟調査所。
- Lukashkin, A. S.
 1938 Fur Bearing Wild Animals on the Barga Steppes. *Contemporary Manchuria* (Dairen) 2(6), 60-84.
- マイスキー, イ
 1927 『外蒙共和国』上・下 (露亜經濟調査叢書) 南滿洲鉄道株式会社庶務部調査課編訳, 大阪：大阪毎日新聞社。
- 満鉄 [南滿洲鉄道株式会社] 地方部衛生課
 1923 『防疫十年誌』大連：南滿洲鉄道株式会社地方部衛生課。
- 満鉄衛生課
 1928 「昭和二年内蒙古に流行せる肺「ベスト」防疫概要」『日本公衆保健衛生協会雑誌』4(4), 143-151。
- マクニール, W. H.
 1985 『疫病と世界史』佐々木昭夫訳, 東京：新潮社。
- 三秋 尚
 1991 『大草原の音が聴こえてくる——モンゴル草原の旅から——』宮崎：鉦脈社。
- 見市雅俊
 1989 「黒死病はベストだったのか——ヨーロッパ・ベスト史研究序説——」『紀要』132(史学科34), 1-109, 中央大学史学科。
- Минис, А., Түдэв, Л., Цэдэнбал-Фялатова, А.И.
 1983 *Хүүхэд залуучуудын нэвтэрхий толь I*. Улаанбаатар: Улсын Хэвлэлийн Газар.
- モーガン, D.
 1993 『モンゴル帝国の歴史』(角川選書234) 杉山正明・大島淳子訳, 東京：角川書店。
- 村上正二
 1970 『モンゴル秘史——チンギス・カン物語——』1 (東洋文庫163) 東京：平凡社。
 1972 『モンゴル秘史——チンギス・カン物語——』2 (東洋文庫209) 東京：平凡社。
 1976 『モンゴル秘史——チンギス・カン物語——』3 (東洋文庫294) 東京：平凡社。
- 村上陽一郎
 1983 『ベスト大流行——ヨーロッパ中世の崩壊——』(岩波新書225) 東京：岩波書店。
- 那珂通世
 1907 『成吉思汗実録』東京：大日本図書。
- Намнандорж
 1964 *Бүгд найрамдах монгол ард улсын дархан газар, ан амьтад*. Шинжлэх ухааны академн, Улаанбаатар: Улсын Хэвлэлийн Газар。
- Nathan, C. F.
 1967 *Plague Prevention and Politics in Manchuria 1910-1931*. Harvard East Asian Monographs 23, Harvard University East Asian Research Center, Cambridge: Harvard University Press.
- 内蒙大蒙語研 (内蒙古大学蒙古語文研究室)
 1976 『蒙漢辞典』呼和浩特：内蒙古人民出版社。
- 西村時彦 (天囚)
 1894 『单騎遠征録』大阪：金川書店。
- 小川 繁
 1930 『内外蒙古に対する露国の活動』東亞小冊, 東京：東亞經濟調査局。
- 岡崎哲也
 1990 「プレーリードッグ 地下の穴からひょっこり」『新どうぶつ記4』pp. 53-58, 東京：朝日新聞社。
- 小澤重男
 1983 『現代モンゴル語辞典』東京：大学書林。
 1985 『元朝秘史全釈 中』東京：風間書房。
- ベフツォフ
 1942 「張家口より庫倫への旅」蒙古研究所訳『蒙古』126(9-12), 84-98。

原山 タルバガン, 野に満ちし頃

ポターニン, Г. Н.

1945 『西北蒙古誌 第2巻 民俗・慣習編』東亜研究所訳, 東京: 龍文書局。

ラムステッド, G.

1992 『七回の東方旅行』荒牧和子訳, 東京: 中央公論社。

リュフィエ, J.・スールニア, J-C.

1988 『ペストからエイズまで——人間史における疫病——』仲澤紀雄訳, 東京: 国文社。

堺 六郎

1987 『シベリアのラーゲリを逃れて——ホロンバイルからシベリアへ——』東京: 筑摩書房。

セヴェリン, Т.

1994 『チンギス・ハーンの軌跡』松田忠徳訳, 東京: 三五館。

志水 語 (満洲里)

1925 「呼倫貝爾タルバガン市況」『満蒙』大正14(11), 54-61。

下永憲次・鈴江万太郎

1933 『蒙古語大辞典(蒙和之部)』陸軍省編, 東京: 偕行社 (1971年の復刻を参照)。

シトニコフ, B. H.

1959 『大陸の野性動物 [哺乳類]』東京: 法政大学出版局。

相馬 隆

1972 「タルバガンに就いて——古代における黄金鉱脈採掘に関する一考察——」『Museum』252, 31-34。

スクニョフ, B. B.

1935 「極東に於けるペストとその研究法」『ソ聯極東地方人種誌』(露文翻訳ソ聯極東及外蒙調査資料13) pp. 154-180, 大連: 満鉄経済調査会。

武本 力

1969 『日本の皮革——その近代化と先覚者と——』東京: 東洋経済新報社。

田村実造・今西春秋・佐藤 長

1966 『五体清文鑑訳注 上巻』京都: 京都大学文学部内陸アジア研究所。

田中末広

1934 『満蒙副業資源読本』京都: 立命館出版社。

田山 茂

1967 『蒙古法典の研究』東京: 日本学術振興会。

手島 茂

1938 「満洲国ニ輸入サルル毛皮ニ関スル調査」『北満経済月報』2(5), 34-71。

鳥居きみ子

1931 『土俗学上より観たる蒙古』東京: 六文館。

鳥居龍蔵

1975 「蒙古旅行」『鳥居龍蔵全集 9』pp. 1-283, 東京: 朝日新聞社 (原刊博文館 1907年)。

豊田太郎

1928 「満蒙の肺「ペスト」に就て」『日本伝染病学会雑誌』2(5), 461-477。

1935 『満洲の医事殊に伝染病』九大医報特別号, 福岡: 九州帝国大学学友会出版部。

ЦСУ

1971 50 лет МНР. Улаанбаатар: Центральное Статистическое Управление при Совете Министерства МНР.

ツェレンソドノム

1981 『モンゴル民話研究』蓮見治雄訳注, 東京: 開明書院。

ウノニハルヴァ

1971 『シャマニズム——アルタイ系諸民族の世界像——』田中克彦訳, 東京: 三省堂。

王恩博・楊翰源

1983 『新疆齧齒動物誌』烏魯木齊: 新疆人民出版社。

WHO

1970 WHO Expert Committee on Plague, Fourth Reports. WHO Technical Report Series 447, 5-25.

Wu Lien-Teh (伍連徳)

1929 Studies upon the Plague Situation in North China. *National Medical Journal XV*, 273-306.

米内山庸夫

1938 『蒙古風土記』東京：改造社。

吉田順一

1981 「タルバガンとモンゴル」『知識』21, 145-147。

袁林

1994 『西北災荒史』蘭州：甘肅人民出版社。

張承志

1986 『モンゴル大草原遊牧誌——内モンゴ自治区で暮らした四年——』（朝日選書301）東京：朝日新聞社。

ジグムド

1991 『モンゴル医学史』ジュルンガ・竹中良二訳，東京：農文協。

付 記

参考文献のうち、(ルカーンキン 1937) は、所蔵者である大分大学経済研究所の、(春日 1986) は北里薬品産業株式会社の御厚意によって参照することができた。

論中に引用したモンゴル国発行の新聞記事の一部は、『モンゴル月報』（外務省アジア局中国課）、『モンゴル通信』（京都 アルド書店）、『日本とモンゴル』（社団法人日本モンゴル協会）によった。明記して関係者各位に謝意を表すものである。